

517. 2-J61㊦



1200500745051

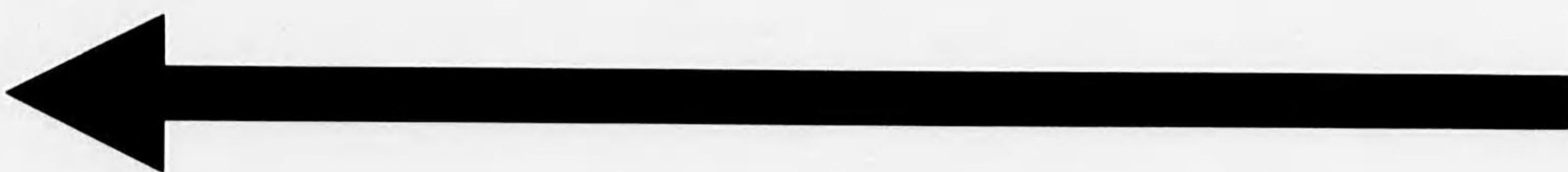
7.2
1

立山砂防ト常願寺川

常願寺川治水期成同盟會編



始



91
12

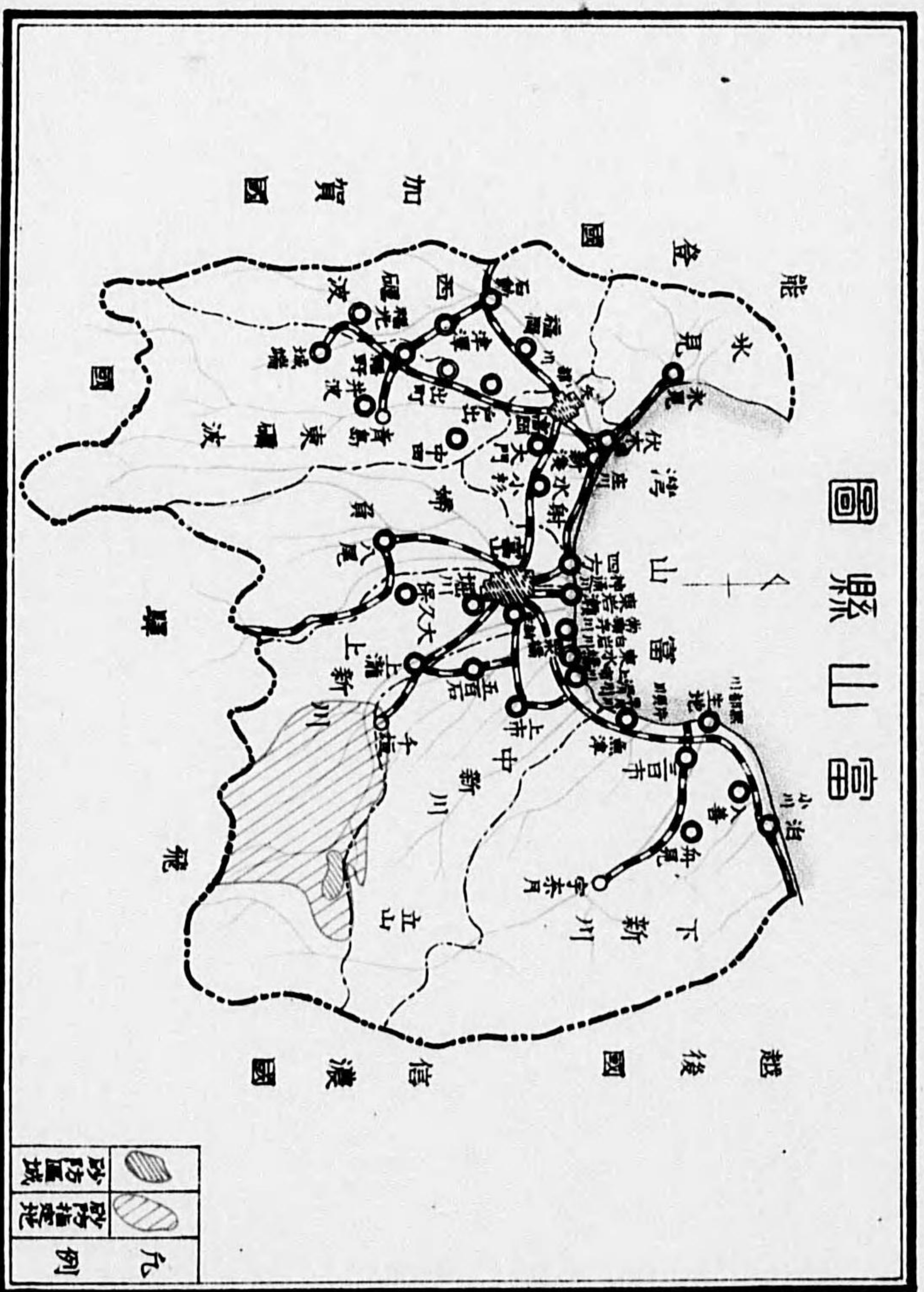
517.2
J61

立山砂防卜常願寺川

納本

常願寺川治水期成同盟會

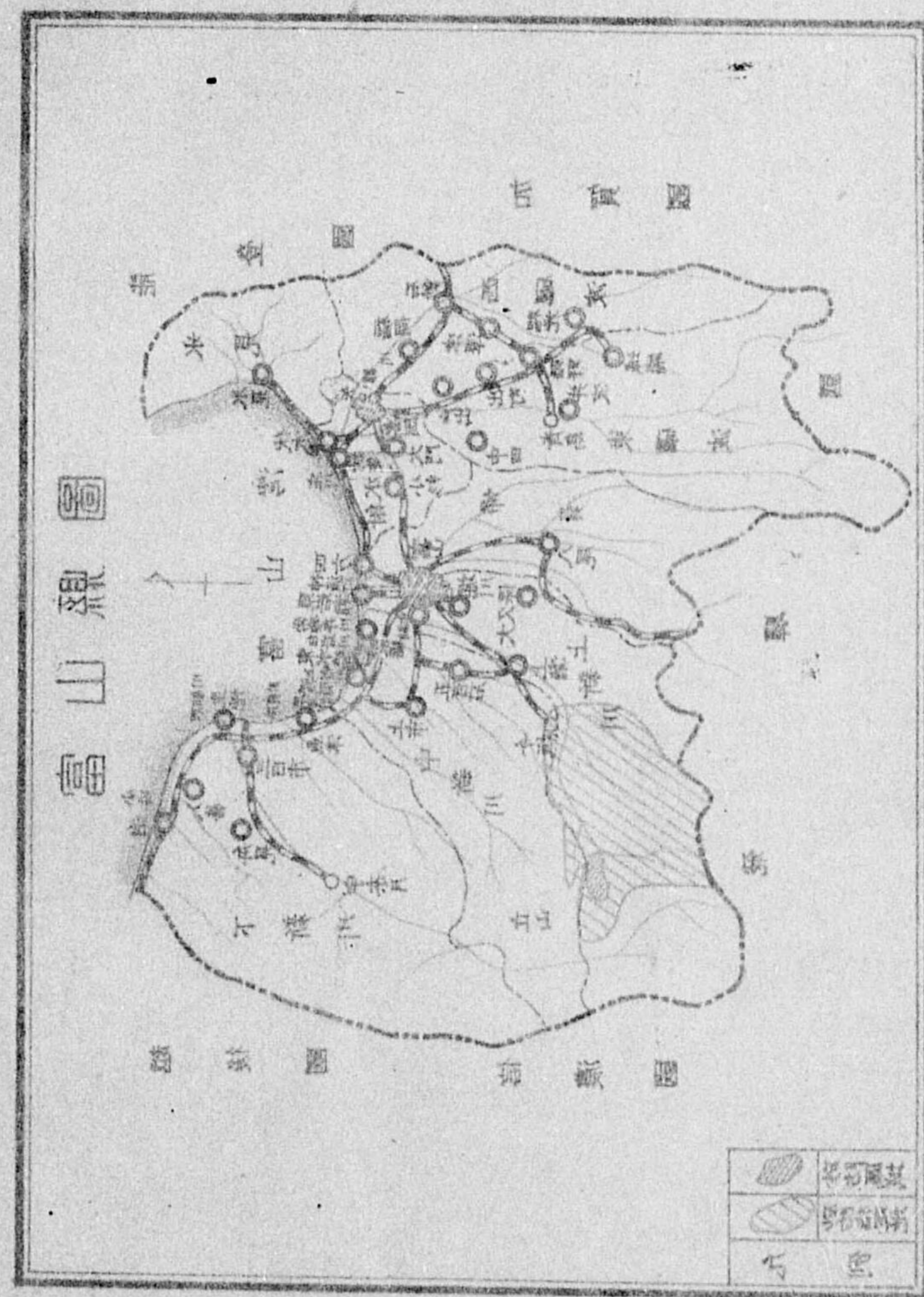




堤堰岩白ノ前災被日六月七年八正大



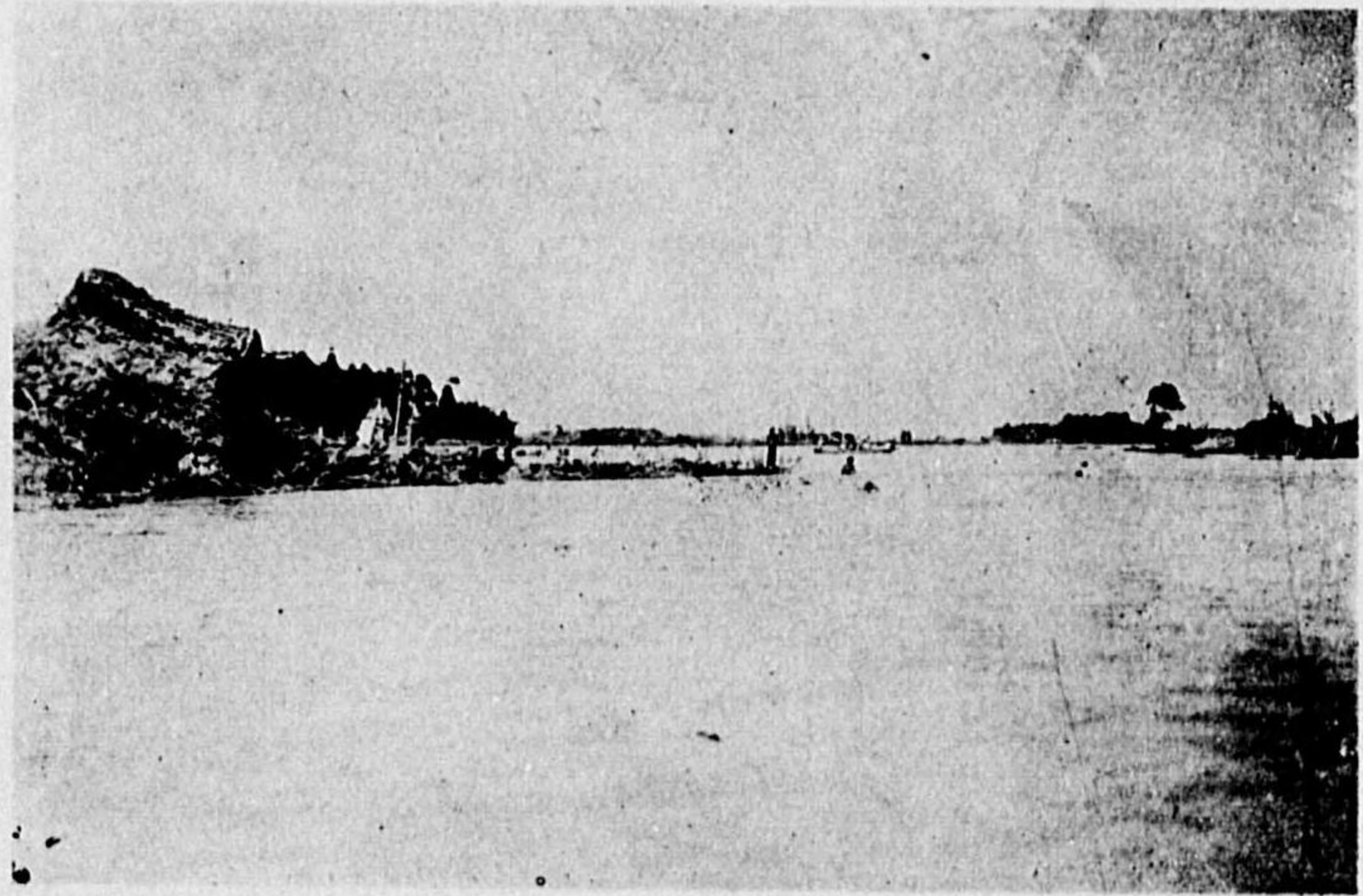
堤堰岩白ノ後災被上同



山政安岸左川寺願常年三正大
地害被ノ裏林櫛殿シ壊破防堤



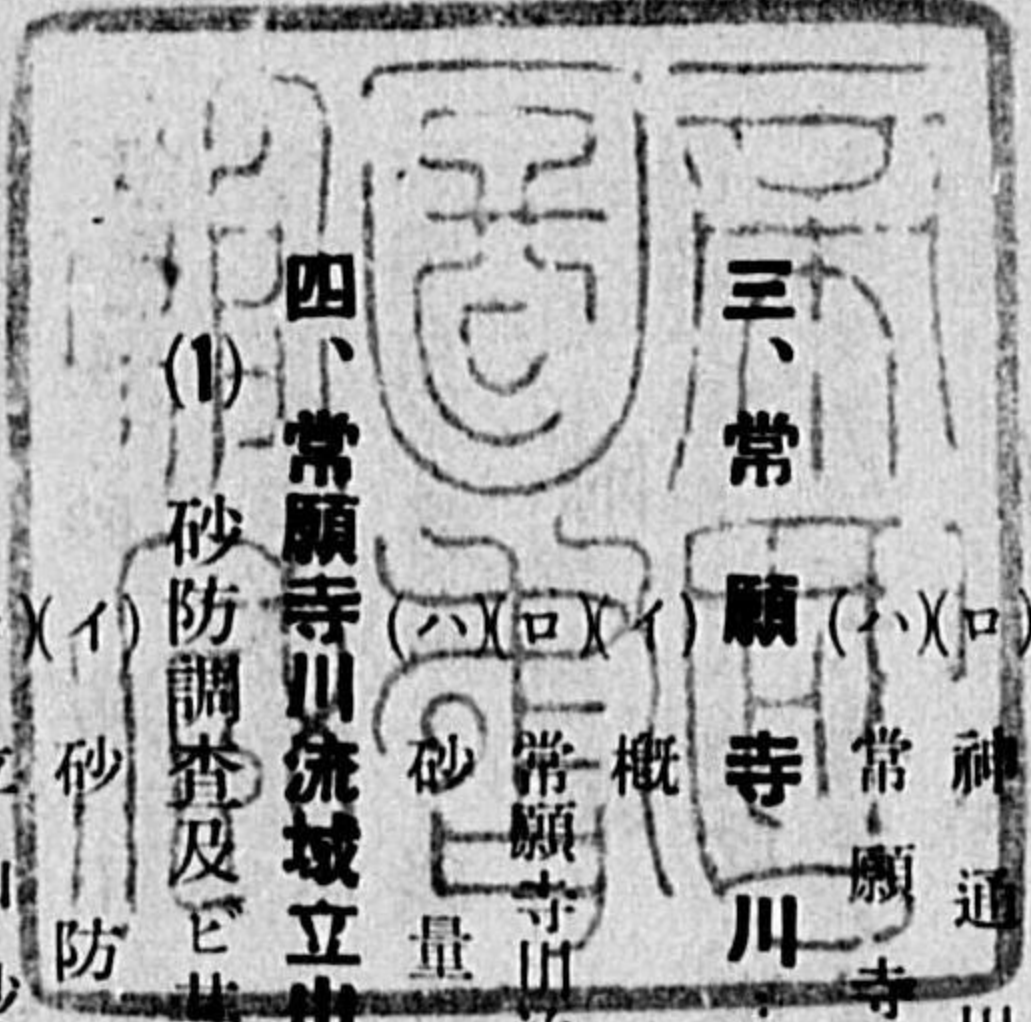
村原針ルナ流下ノ其シ濫汎ニ村島流濁川寺願常年三正大
況状ルアツメシセ變ニ海泥ノ面一ニ面方村崎黒濱





目次

一、緒言	1
二、富山縣ニ於ケル砂防工事ノ沿革	2
(イ) 庄川流域	2
(イ) 神通川流域	2
(イ) 常願寺川流域	2
三、常願寺川	3
(イ) 概観	3
(イ) 常願寺川治水ノ沿革	3
(イ) 砂防指定	3
四、常願寺川流域立山砂防	3
(1) 砂防調査及ニ其ノ結果	7
(イ) 砂防調査	7
(イ) 立山砂防區域	8
(イ) 砂防指定地ト水源地取縮規則並ニ水源地ノ買収	8
(イ) 工費豫算並ニ施工計畫ト其ノ變遷	9
(2) 立山砂防區域ノ狀況	11
(イ) 地質	11
(イ) 氣象	13



(ハ)	荒廢狀況	一三
(ニ)	崩壊ノ原因	一五
(ホ)	安政五年ノ震災	一五
(三)	砂防工事及其ノ成績	一七
(イ)	縣營工事ノ大要及其ノ結果	一七
(ロ)	國營砂防工事	一九
(四)	砂防工事費	二〇
(イ)	縣營工事費	二〇
(ロ)	國營工事費	二一
(五)	將來ノ砂防工事	二一

附 錄

- 一、安政五年戊午二月ノ震災ニ關スル舊記拔萃
 - 二、震災ノ爲メ湯川筋崩壊ノ見取圖
- 附 圖
- 一、富山縣管內圖
 - 二、常願寺川筋砂量高低表
 - 三、立山砂防區域平面圖

立山砂防ト常願寺川

一、緒 言

古語ニ曰ク「河ヲ治メント欲セハ、先ヅ山ヲ治ムベシ」ト、之レ眞ニ、至言ト謂フベシ。我が國ニ於テ水害ノ類々タルハ、畢竟水源山地ノ荒廢ニ基因スル所甚大ナリトス。此ノ實狀ニ鑑ミ、政府ハ、明治三十年、砂防法ヲ發布シ、同四十年ニハ森林法ノ制定ヲ見ルニ至レリ。本縣ノ河川ハ地勢ノ關係上、何レモ水勢急湍ニシテ、就中常願寺川ノ如キハ其ノ最モ著シキモノナリトス。而カモ其ノ水源山地ノ荒廢ハ極度ニ達シ、累年砂礫ヲ流下スルコト下夥シク、爲メニ、河狀ハ惡化シ、流身ハ狂亂極リナク、其ノ暴狀ハ全國稀ニ見ル所ナリ。之レガ治水ノ方策ニ就テハ、爲政者ノ最モ苦慮スル所ニシテ、明治三十七年李家知事ハ、常願寺川流域ノ砂防調査ヲ行ヒ、同三十九年度以降國庫補助ヲ仰ギ、砂防工事ヲ起シ、爾來十七ケ年繼續セシモ其ノ效果顯著ナラザルノミナラズ、爾後工事ノ施行ハ、益々困難トナリ、爲ニ、一縣ノ財政ニテハ到底之ガ設備ノ完成ヲ期スルコト能ハザルノ悲境ニ陥リタリ。此ノ實狀ハ、幾多碩學ノ踏査ニヨリ、漸ク世上ニ認メラレ大正十三年砂防法改正ノ結果、同十五年度ヨリ政府直轄ノ事業トシ、國土保全ノ爲メ銳意施行中ナリ。茲ニ於テ我が縣民モ、漸ク愁眉ヲ開キ其ノ施設ノ一日モ速カニ完成センコトヲ待望シツ、アリ。以下少シク其ノ狀況ヲ述べ江湖ノ參考ニ資セントス。

二、富山縣ニ於ケル砂防工事ノ沿革

(イ) 庄川流域

内務省ハ明治十五年度ヨリ同十八年度マデ四ケ年間高岡市ニ土木局出張所ヲ設ケ、庄川流域ニ砂防工事ヲ施シタリ、之レ本縣ニ於ケル砂防工事施行ノ嚆矢トス。
同工事ハ庄川ノ右岸庄金剛寺村、長崎村、祖山村、左岸渡ノ原村地内竝支流利賀川筋仙納原村、高沼村地内及小矢部川支流、山田川ノ水源大鋸屋村等ノ地内ニ亘リ工事ヲ進メシガ惜イ哉、其効果ヲ見ルニ先ダチ明治十八年度限り之ヲ中止セラレタリ。

(ロ) 神通川流域

神通川上流宮川筋岐阜縣吉城郡坂下村地内桑谷、小豆澤並ニ瀧谷ノ三溪流及ビ支流高原川筋全郡船津町地内、六郎谷ハ其ノ荒廢甚シク、爲メニ、下流本川ニ多量ノ砂礫ヲ流出シ、治水上支障尠カラザルニヨリ、政府ハ、大正八年七月ヨリ昭和六年三月ニ亘リ、直轄砂防工事ヲ施行セリ。次デ同郡上寶村燒岳附近ノ砂防ハ昭和七年度ヨリ同十六年度ニ亘ル十ケ年繼續事業トシテ起工シ、目下施行中ナリトス。

(ハ) 常願寺川流域

本縣各河川中、砂礫流出ノ被害最モ著シキハ常願寺川ニシテ、其ノ被害逐年多大ナリシガ、李家知事ハ、水源荒廢地ノ復舊ヲ計ラザレハ、到底之レヲ防止シ難キヲ悟リ、乃チ、土砂扞止、水源涵養ノ目的ヲ以テ砂防工事ヲ劃策シ、明治三十七年度ヨリ砂防調査ニ着手シ、同三十九年度以降始メテ二十ケ年計畫ヲ樹立

シ、爾來國庫補助ヲ得テ毎年工事ヲ實施スルニ至レリ。
明治三十七年度豫算ニ關シ、李家知事ノ通常縣會ニ於ケル説明要領左ノ如シ。
本縣經濟上財政ノ困難ナルハ、既ニ認知サル、所ナリト雖、明治二十九年以來、災害土木費ノ爲メニ、巨額ノ縣債アリ、加フルニ、利率亦高度ヲ極ムルガ故ニ、其ノ整理上、豫算ハ可成節約ヲ爲セシモ、將來本縣ノ幸福ヲ増進シ、或ハ交通機關ノ設備等、緩急ヲ謀リテ提案セリ。乃チ、公利公福ヲ目的トセル新事業トシテ、警察電話、砂防調査、早月川架橋又ハ道路改修等其ノ主ナルモノナリ。就中砂防調査ノ如キハ、先般來縣下ノ主ナル河川ノ水源地ヲ踏査セシニ、森林ノ濫伐、薙畑、或ハ耕作ノ結果、傾斜地ニ於ケル雨水ノ流下ニヨリ、土石ノ崩落實ニ甚シク、漸次下流ニ堆積シ、遂ニ洪水氾濫ノ原因トナレリ。今之レヲ救済スルニ非ザレハ、再ビ收拾スベカラザル大崩壞ヲ來シ、之レガ爲メ下流沿岸ニ於テ、如何ニ水防工事ヲ施スモ、全ク治水ノ目的ヲ完フスル事ヲ能ハザルヲ觀破シ、來年度ヨリ砂防調査ヲナシ、以テ土砂扞止ノ方法ヲ攻究スルノ必要ヲ認メ、其ノ費用トシテ金貳千六百餘圓ヲ提案セリ。
茲ニ於テ始メテ常願寺川流域ノ砂防設備ヲ提唱セラレ、縣會ノ協賛ヲ得テ、立山砂防工事ハ生レ出デタリ。

三、常願寺川

(イ) 概 念

常願寺川ハ、縣下五大川ノ一ニシテ、其ノ流域面積二十四方里、内山地二十二方里平地二方里、本縣治水調査ノ結果、流量毎秒十萬立方尺ト稱セラル。流路延長十六里餘、其ノ内山間ヲ流ル、事約十二里餘ナリ。

從而本邦稀ニ見ル急流ニシテ、平地ト目スベキ上瀧町附近ニアリテハ、河床勾配六十分ノ一、日置橋附近ハ八十五分ノ一、下流ハ六百分ノ一ナリ。

本川ハ、海拔數千尺ノ峻峯峴岨タル「日本北アルプス」ノ中樞ニ源ヲ發シ、眞川、湯川兩川ノ合流ニヨリテ形成サル。而シテ右岸ニハ、稱名川、左岸ニハ小口川、和田川ノ支流アリ。眞川ハ飛越國境ニ、湯川ハ淨土山及ビ鷲羽岳ノ中間ニシテ、史上名高キ佐良峠ニ源ヲ發シ、其ノ沿岸ハ悉ク崩壊地ナリト云フモ過言ニアラズ。稱名川ノ水源ハ立山ニシテ、小口川、和田川ハ共ニ飛越ノ境ヨリ流レ出ヅ。而シテ眞川ニハ、右岸ニ道古谷、菅生谷及ビ岩井谷ノ支流アリ。又湯川ニハ、右岸ニ松平谷、水谷アリ、左岸ニハザラ谷、鷲ヶ谷、濁汁谷、湯谷、金山谷、泥谷、出シ原谷、中ノ谷、西ノ谷、新谷、大正谷ノ溪流アリ。就中湯谷以下ノ諸溪流ハ、悉ク急勾配ニシテ、崩壊著シキ嵩山ノ斷崖ヨリ流出スルガ故ニ、降雨又ハ融雪ノ期ニ於テ、土砂石礫ヲ搬出スル事最モ夥シ。

斯クノ如ク上流方面ハ急湍相亞グ山地ナルヲ以テ、發電地點ニ富ミ、其ノ包藏水力ハ十七萬三千餘「キロワット」ニ達シ、既ニ十萬二千餘「キロワット」ヲ發電シ目下工事中ノモノ六萬四千「キロワット」アリ下流ハ、上新川、中新川兩郡ノ田畑ヲ灌溉シ、其ノ反別一萬二千餘町歩ニ及ビ、水利ノ恩惠ヲ享クルコト甚大ナリ。

本川ハ、大正十年政府臨時治水調査會ニ於テ、第二期河川ニ編入セラレ、爾來、縣ハ沿岸市町村ノ組織セル常願寺川治水期成同盟會ト相呼應シ、直轄改修促進方ヲ要請シ、政府モ亦、其ノ實狀ニ鑑ミ調査ヲ終了セリ。然ルニ昭和九年七月ノ大洪水ハ、將ニ新川平野ヲ濁水ノ下ニ葬リ、遠ク富山市ヲ襲ハレントスルノ狀勢ニ鑑ミ、單ナル復舊工事ノ施行ニテハ、到底沿岸住民ヲ其ノ居ニ安ンゼシムル事能ハズ、依テ昭和十一年度ヨリ直轄改修工事ニ着手セラレ、ニ至レリ。

斯ク水利上大ノ關係アル本川ナレハ、昭和三年八月十三日內務省告示第二百十六號ヲ以テ河川法ヲ施行セラレ、其ノ延長六里ニシテ、右岸立山村横江、左岸大山村松木間ニ架設セル池乃口橋ヨリ下流全川ヲ其ノ區間トセリ。同橋ヨリ上流ハ、和田川、小口川、稱名川、眞川、湯川ノ支川、並ニ小支川ヲ加ヘテ延長十七里二十二町ハ、準用河川ニ認定サル。

(口) 常願寺川治水ノ沿革

本川ハ、往古河中漸ク百間内外ニ過ギズ、堤防ハ僅ニ點ニ在セルノミニシテ、流身深ク、自然ノ護岸ニヨリテ沿岸ハ保護セラレ、河水清澈ニシテ魚族棲息シ、然モ中流以下ニハ舟楫ノ便開ケ、松間ニ白帆ヲ眺メ、地方ヲ利スル事多大ニシテ、水災ノ見ルベキモノハ、僅ニ、天正八年ノ秋、元祿十四年八月、同十六年七月、寶永四年六月、天明三年六月、並ニ寛政元年六月ノ大洪水ニテ、十指ヲ屈シテ尙餘アリトス。然ルニ安政五年二月ノ震災ハ、湯川筋嵩山一帶ノ大崩壊ト共ニ、眞川筋其ノ他到ル處ニ、山岳ノ崩壊ヲ現出シ、水源ノ荒廢極度ニ達セリ。爾來砂礫ノ流出夥シク、河底漸次嵩マリ、濁流沿岸ヲ咬ミ、河狀一變シ、一市二郡ノ住民ヲシテ、常ニ不安ヲ抱カシムル今日ノ狀態トナリス。

當時、舊藩主前田家ニアリテハ、出水被害ノ沿岸村落並ニ富山城下ニ及ス影響ノ重大ナルヲ慮リ、保安上沿岸ニ護岸ヲ築造シ、水防林ノ成育ニ努メ、洪水防禦ノ設備ニ意ヲ竭シ、藩主自ラ毎年鷹狩ニ名ヲ藉リテ兵馬ノ訓練ニ兼ネ、水害豫防ノ狀況視察ヲ怠ラザリキ。爾來堤防ハ後退築設シ、河中ヲ往時ニ比シ、百間乃至二百間擴張シタリト雖、洪水防禦ノ効ナク、氾濫破堤相次デ起リ、慘害ノ止ル所ヲ知ラズ。明治十四

年夏、内務省土木局長心得福島久成氏が、常願寺川所見ノ題下ニ述ベラレタル一詩

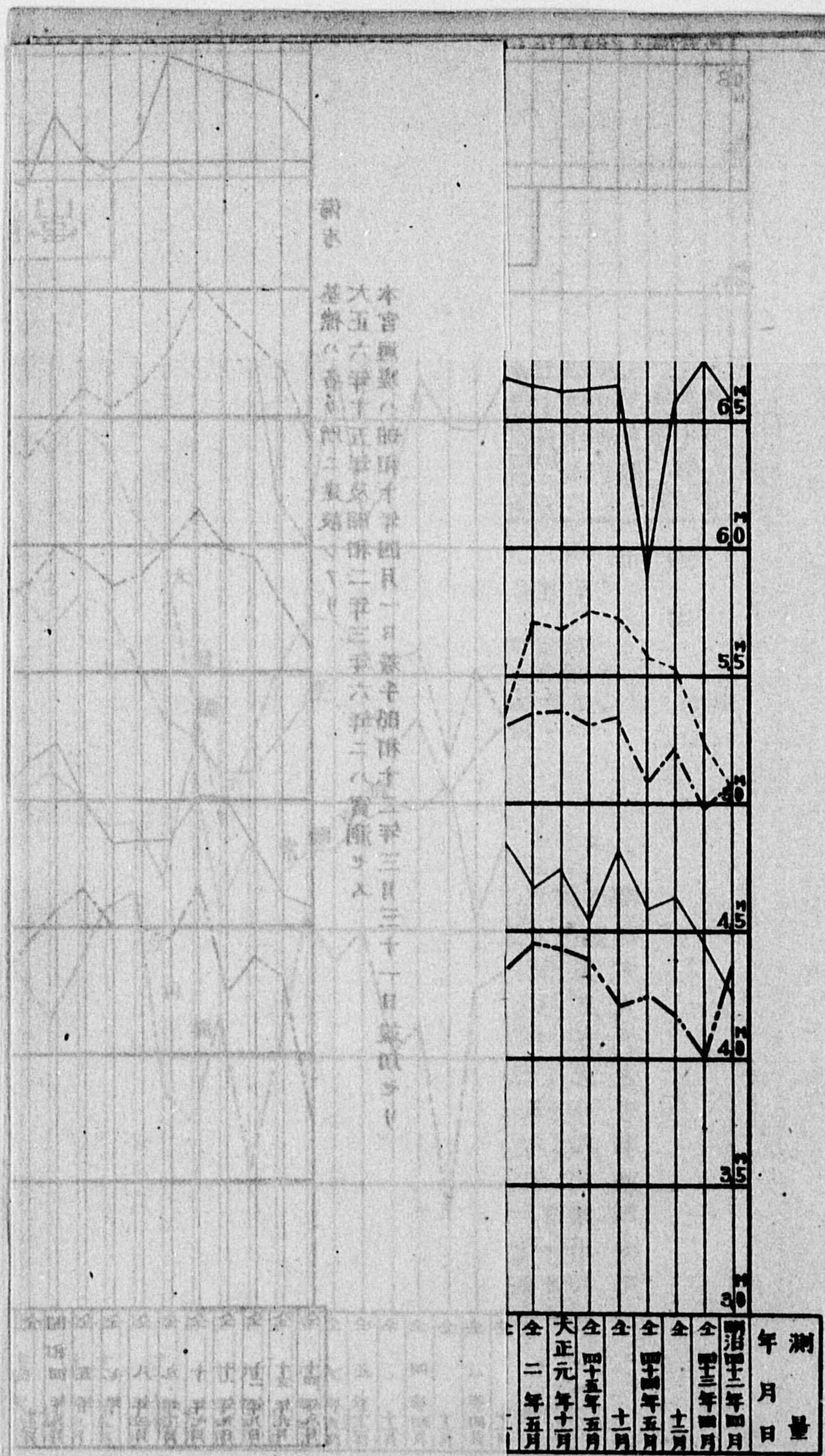
川心砂埋欲齊坡 不怪年年洪水多

天若幸無罪是歲 修工須法禹治河

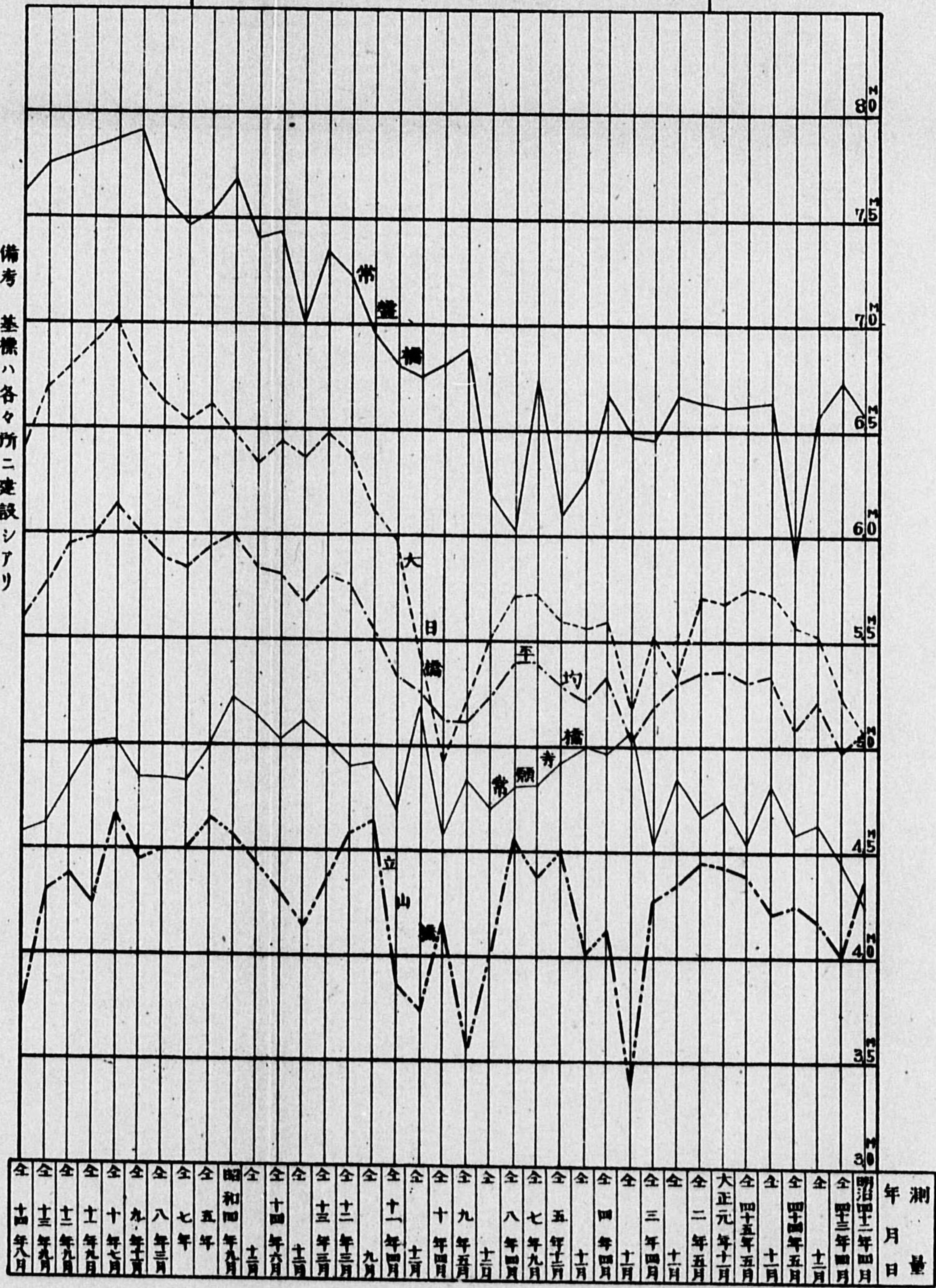
ハヨク河狀ヲ明カニスルモノナリ。

殊ニ明治二十四年七月十九日ノ洪水ハ、水位一丈七尺ニ達シ、慘害特ニ著シク、浸水二十一日間ニ亘リ、慘狀目モ當テラレズ、畏クモ

明治大帝ニハ、毛利侍從ヲ差遣セラレ、沿岸民ヲ慰撫セシメ給ヘリ。於是、本川改修ノ企畫ヲ樹テ、内務省雇工師和蘭人「ヨハネス、デレエケー」氏ヲ招聘シ、其ノ計畫ニ基キ、工費百五萬圓（内國庫補助九十五萬圓縣費拾萬圓）ヲ以テ、同二十四年十二月起工シ、同二十六年三月ヲ以テ、常盤橋（一里二十四町附近）ヨリ下流ノ河身ヲ改修シ、上瀧町附近ヨリ下流ニ於テ新堤延一萬四千五百十間ヲ築キ、舊堤延三千三百四十間ヲ修理シ、今日ニ及ベルモ水源山地ノ荒廢甚シキ爲メ河狀改ラズ、田面ト河床トノ高低差ハ、昔時ニ反シ、田面ノ低キコト二十餘尺ニ達スル個所アリ、故ニ一朝出水ニ際會シ、護岸、堤防ヲ欠潰セハ、濁流奔逸、田園村落ヲ浸シ、遠ク富山市ヲ襲フニ至ル。大正三年ノ水害ハ、近年稀ナルモノニシテ、先づ朝日前ノ堤防ヲ欠潰シ、次デ大中島ノ堤防ヲ覆滅シ、更ニ上瀧大庄ノ堤防ヲ突破シ、濁流ハ土石ヲ堤内ニ運ビ、其ノ堆積十數尺ノ高サニ達シ、巨石磊々トシテ沃野ヲ埋没セリ。被害堤防ノ延長三千四百七十二間氾濫面積實ニ五千四百餘町歩、損害額二百四十餘萬圓ニ達セリ。次デ大正十一年七月ノ豪雨ニハ、鳶山ノ大崩壊ヲ來シ、多量ノ土石ヲ流下シ、數ヶ月ニ亘リテ河水ノ清澄ヲ見ズ。此レガ爲メニ、兩岸堤防延長四



常願寺川筋砂量高低表



備考
 基準ハ各々所ニ定設シアリ
 大正六年十五年及昭和二年三年六年ニハ實測セズ
 本宮堰堤ハ昭和十年四月一日着手昭和十二年三月三十一日竣功セリ

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

年夏、内務省土木局長心得福島久成氏が、常願寺川所見ノ題下ニ述ベラレタル一詩
 川心砂埋欲齊坡 不怪年々洪水多
 天若幸無罪是歲 修工須法禹治河
 ハヨク河狀ヲ明カニスルモノナリ。
 殊ニ明治二十四年七月十九日ノ洪水ハ、水位一丈七尺ニ達シ、慘害特ニ著シク、浸水二十一日間ニ亘リ、慘狀目モ當テラレズ、畏クモ
 明治大帝ニハ、毛利侍從ヲ差遣セラレ、沿岸民ヲ慰撫セシメ給ヘリ。於是、本川改修ノ企畫ヲ樹テ、内務省雇工師和蘭人「ヨハネス、デレエケ」氏ヲ招聘シ、其ノ計畫ニ基キ、工費百五萬圓（内國庫補助九十五萬圓縣費拾萬圓）ヲ以テ、同二十四年十二月起工シ、同二十六年三月ヲ以テ、常盤橋（一里二十四町附近）ヨリ下流ノ河身ヲ改修シ、上瀧町附近ヨリ下流ニ於テ新堤延一萬四千五百十間ヲ築キ、舊堤延三千三百四十間ヲ修理シ、今日ニ及ベルモ水源山地ノ荒廢甚キ爲メ河狀改ラズ、田面ト河床トノ高低差ハ、昔時ニ反シ、田面ノ低キコト二十餘尺ニ達スル個所アリ、故ニ一朝出水ニ際會シ、護岸、堤防ヲ欠潰セハ、濁流奔逸、田園村落ヲ浸シ、遠ク富山市ヲ襲フニ至ル。大正三年ノ水害ハ、近年稀ナルモノニシテ、先づ朝日前ノ堤防ヲ欠潰シ、次デ大中島ノ堤防ヲ覆滅シ、更ニ上瀧大庄ノ堤防ヲ突破シ、濁流ハ土石ヲ堤内ニ運び、其ノ堆積十數尺ノ高サニ達シ、巨石磊々トシテ沃野ヲ埋没セリ。被害堤防ノ延長三千四百七十二間

常願寺川河床高調査表

測 點	距 離	明治四十二年		明治四十五年		大正三年		大正七年		大正十年		大正十三年		昭和五年		平均 高低差
		河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	
常願橋		4.481		4.772	0.291	4.799	0.027	5.078	0.279	4.812	(0.266)	5.272	0.460	5.227	(0.045)	0.746
常盤橋	4.280.0	16.622		16.692	0.070	16.538	(0.154)	16.813	0.275	16.889	0.076	17.422	0.533	17.607	0.185	0.985
大日橋	3.500.0	47.235		47.957	0.722	47.720	(0.237)	47.902	0.182	47.114	(0.788)	48.666	1.552	48.814	0.148	1.579
立山橋	8.000.0	166.222		166.249	0.027	166.098	(0.151)	166.213	0.115	166.004	(0.209)	166.204	0.200	166.495	0.291	0.273
計	15.780.0	101,733.0 15.780		101,597.0 15.780		103,126.0 15.780		104,973.0 15.780		103,173.0 15.780		102,923.0 15.780		102,637.0 15.780		155,324 15.780
平均		64.051		64.378	0.327	64.214	(0.164)	64.420	0.206	64.863	(0.357)	64.873	0.81	65.040	0.167	0.989
測 點	距 離	昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年		昭和十四年		昭和十五年		平均 高低差
		河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	河床 平均高	前年ト 比較	
常願橋		5.090		5.273	0.183	5.244	(0.029)	5.084	(0.160)	4.865	(0.219)	4.836	(0.029)			(0.254)
常盤橋	4.280.0	18.002		17.986	(0.016)	17.911	(0.075)	17.886	(0.025)	17.867	(0.019)	17.717	(0.150)			(0.285)
大日橋	3.500.0	48.940		49.226	0.286	49.094	(0.132)	48.987	(0.107)	48.768	(0.219)	48.560	(0.208)			(0.380)
立山橋	8.000.0	166.294		166.503	0.209	166.071	(0.432)	166.232	0.161	165.846	(0.386)	165.600	(0.246)			(0.694)
計	15.780.0	102,521.0 15.780		102,911.0 15.780		102,747.0 15.780		102,705.0 15.780		102,713.0 15.780		102,088.0 15.780				661,327 15.780
平均		65.114		65.292	0.178	65.112	(0.180)	65.086	(0.026)	64.874	(0.212)	64.695	(0.179)			(0.419)

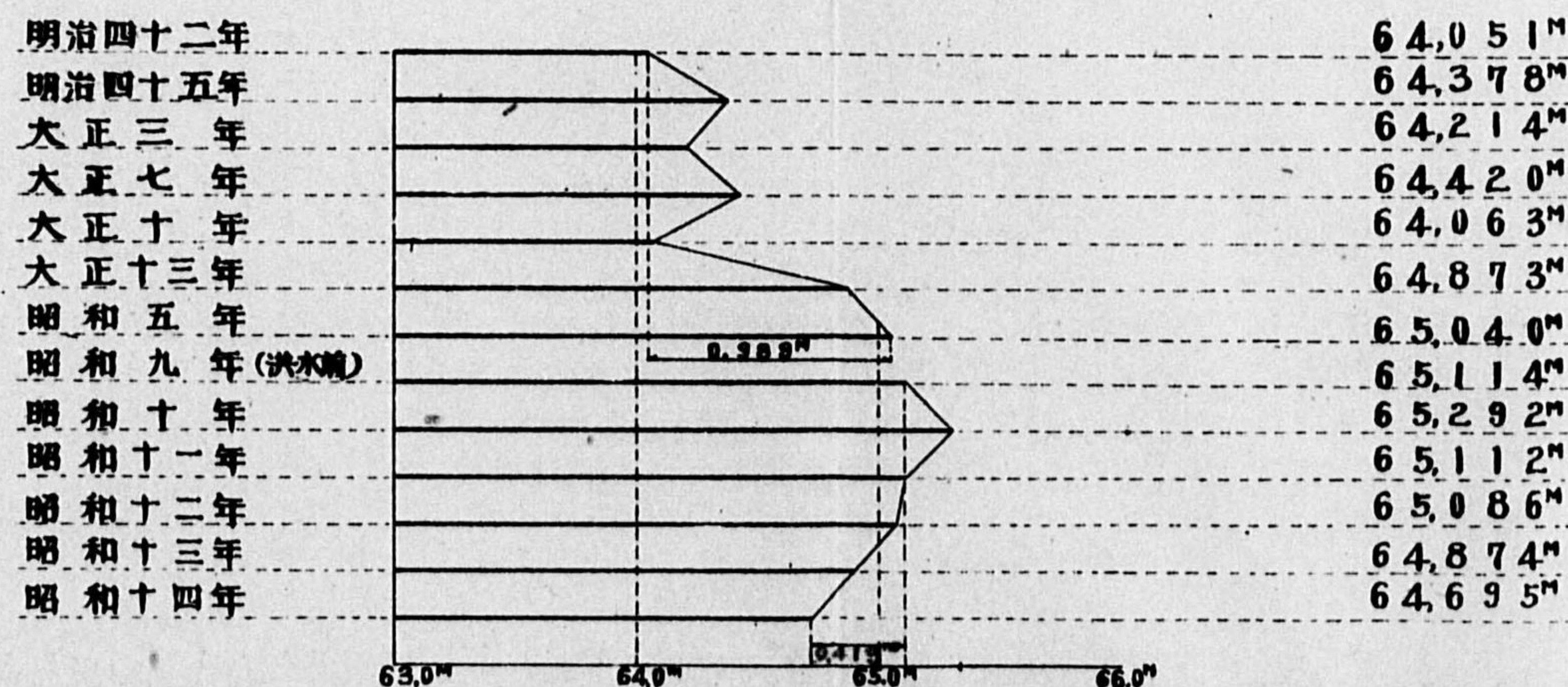
摘 要

前年ト比較欄中()内ノ数字ハ低減ヲ示シ然ラサルモノハ増高ヲ表ス平均高低差ニ於テモ同ジ

備 考

明治四十二年ヨリ昭和五年迄ハ三年毎ニトリタルモノニシテ其ノ年間ノ上下流ヲ平均シテ0.989^m上昇セリ
 昭和九年ヨリ昭和十四年迄ハ一年毎ニトリタルモノニシテ其ノ年間ノ上下流ヲ平均シテ0.419^m低下セリ
 各断面ノ合計平均高ハ相隣レル各断面ノ河床平均高ノ平均ニ其ノ距離ヲ乗ジタルモノヲ總和ヲ距離ノ總和
 ニテ除ジタルモノトス

河 床 變 遷 比 較 表



備 考 本宮堰堤ハ昭和十年四月一日ニ着手シテ昭和十二年三月三十一日竣功セリ

年度	千九百餘間ニ對シ、嵩上工費十六萬二千餘圓ヲ、又用水ニ於テハ土砂排除ノ施設ヲ要シ、堆積土量二萬五千餘坪ノ排除費二萬七千餘圓、其ノ他沈砂池等ノ復舊費三萬九千餘圓ヲ支出スルノ餘儀ナキニ到レリ。殊ニ用水路ノ埋塞ハ、時恰モ灌漑期ノ央ニ生ゼシヲ以テ、農民ノ困憊其ノ極ニ達シヌ。尙斯クノ如キ被害陸續トシテ起リ、最近大正十一年ヨリ、昭和六年ニ至ル十ヶ年平均水害損失額ハ、二十萬五千九百三十圓ニシテ、其ノ最大ハ昭和四年ノ六十萬五千三百四十二圓ナリトス。
昭和四年	60,500
昭和五年	55,000
昭和六年	50,000
昭和七年	45,000
昭和八年	40,000
昭和九年	35,000
昭和十年	30,000
昭和十一年	25,000
昭和十二年	20,000
昭和十三年	15,000
昭和十四年	10,000
昭和十五年	5,000
昭和十六年	0,000
昭和十七年	0,000
昭和十八年	0,000
昭和十九年	0,000
昭和二十年	0,000

千九百餘間ニ對シ、嵩上工費十六萬二千餘圓ヲ、又用水ニ於テハ土砂排除ノ施設ヲ要シ、堆積土量二萬五千餘坪ノ排除費二萬七千餘圓、其ノ他沈砂池等ノ復舊費三萬九千餘圓ヲ支出スルノ餘儀ナキニ到レリ。殊ニ用水路ノ埋塞ハ、時恰モ灌漑期ノ央ニ生ゼシヲ以テ、農民ノ困憊其ノ極ニ達シヌ。尙斯クノ如キ被害陸續トシテ起リ、最近大正十一年ヨリ、昭和六年ニ至ル十ヶ年平均水害損失額ハ、二十萬五千九百三十圓ニシテ、其ノ最大ハ昭和四年ノ六十萬五千三百四十二圓ナリトス。

然ルニ昭和九年度ノ水害ハ、左岸大庄村、太田村、島村並ニ右岸大森村、利田村等到處ニ堤防欠潰シ、將ニ新川平野ヲシテ泥海タラシメ、富山市ヲ襲ハントシタルモ、沿岸民總出動ノ水防作業漸ク奏効シ、辛ジテ其ノ難ヲ免レタルハ幸ナリキ。斯クノ如キ状態ニアルヲ以テ政府ニ於テモ、現況ノ儘放擲シ置キ難キ實狀ヲ認メ、昭和十一年度ヨリ同二十四年度ニ至ル十四ヶ年繼續事業トシ、右岸立山村、左岸大山村ヨリ下流ヲ改修シ、上流ニハ土砂扞止ノ目的ヲ以テ堰堤ヲ築キ、下流ハ常水路ヲ掘鑿シ、兩岸ヨリ水制ヲ施工シテ、河心ヲ此レニ集中スル計畫ノ下ニ、工費總額四百二十萬圓（内縣負擔百三十六萬六千圓）ヲ以テ直轄改修ニ着工シ、目下施行中ナリ。

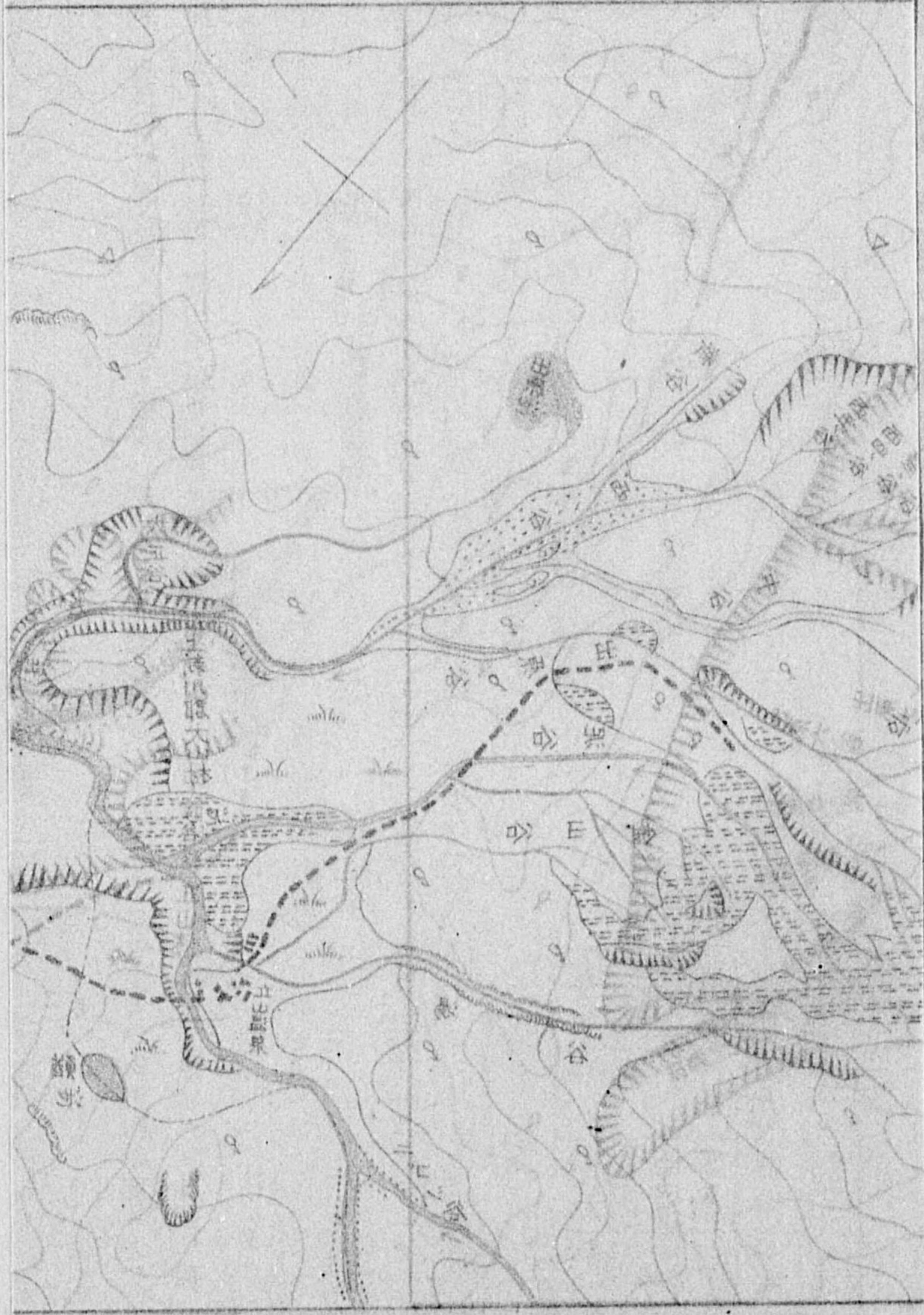
(ハ) 砂量測定

次ニ明治四十二年本川下流ニ堆積スル砂量ノ測定ヲ開始シ、將來ノ參考ニ資セントセリ。即チ別圖ノ如ク宜ク土石堆積ノ狀況ヲ表セリ。

四、常願寺川流域立山砂防

立山砂防區圖

一、八、二、凡、餘



(1) 砂防調査及び其ノ結果

(イ) 砂防調査

既ニ述ベタルガ如ク、李家知事ノ提唱ニ基キ、明治三十七年五月二十六日、始テ常願寺川上流ニ於ケル山地狀況ノ踏査ヲ開始シ、幾多ノ困難ト闘ヒツ、翌三十八年三月二十日ヲ以テ終了セリ。交通不便ノ僻地ニアリテ、彼ノ兀緒ノ山中ニ身命ヲ賭シテノ作業ハ、如何ニ困難ヲ感ゼシカ、想像モ及ハザラン。

(ロ) 立山砂防區域

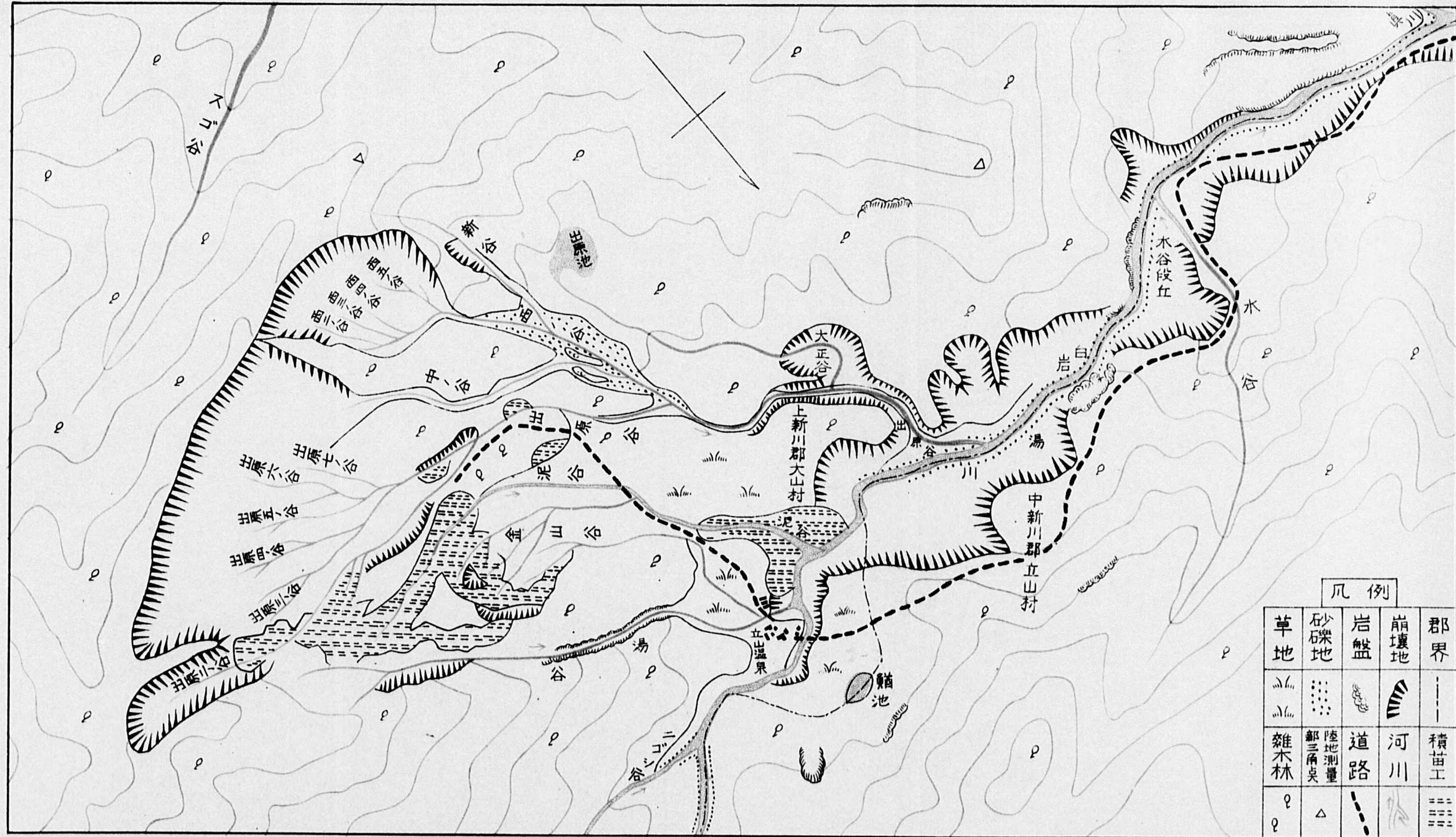
當初調査セシ砂防區域ハ、常願寺川本流ヲ始メ、小口川、和田川、稱名川、眞川及ビ湯川ノ各流域ヲ包含スル頗ル廣汎ナル區域ニシテ、此等ヲ稱シテ立山砂防ト稱ヘタリ。而シテ當時ニ於ケル崩壞面積ハ百五十萬坪ト稱セラレタルモ、其ノ後ノ崩壞面積ヲ加算セハ、二百二十萬坪以上ト推定シテ可ナラン。就中湯川筋ノ崩壞ハ人目ヲ惹キ、荒廢最モ甚シク、下流被害ノ根源ヲナスヲ以テ、銳意之レガ設備ヲ期シタル爲メ今日世ニ、所謂立山砂防區域トシテ知ラル、ハ本流域ヲ指ス事トナレリ。然レ共尙他ニ廣範圍ノ區域ヲ有スルヲ忘ルベカラズ。

(ハ) 砂防指定地ト水源地取締規則並ニ水源地ノ買收

砂防工事ニ着手スルニ當リ、常願寺川流域ノ一部及ビ小口、和田、稱名ノ各支川、並ニ其ノ小支、沿岸一帯ニ砂防法ヲ施行スルコト、シ、明治三十八年三月内務省告示第二四號ヲ以テ施行セラレ、設備地九千六百七十町九反三畝歩、一定ノ行爲禁止制限地一萬五千七百六反五畝歩ニ達シ、本川ノ分水界ヲ以テ大体ノ施

立山砂防區域平面圖

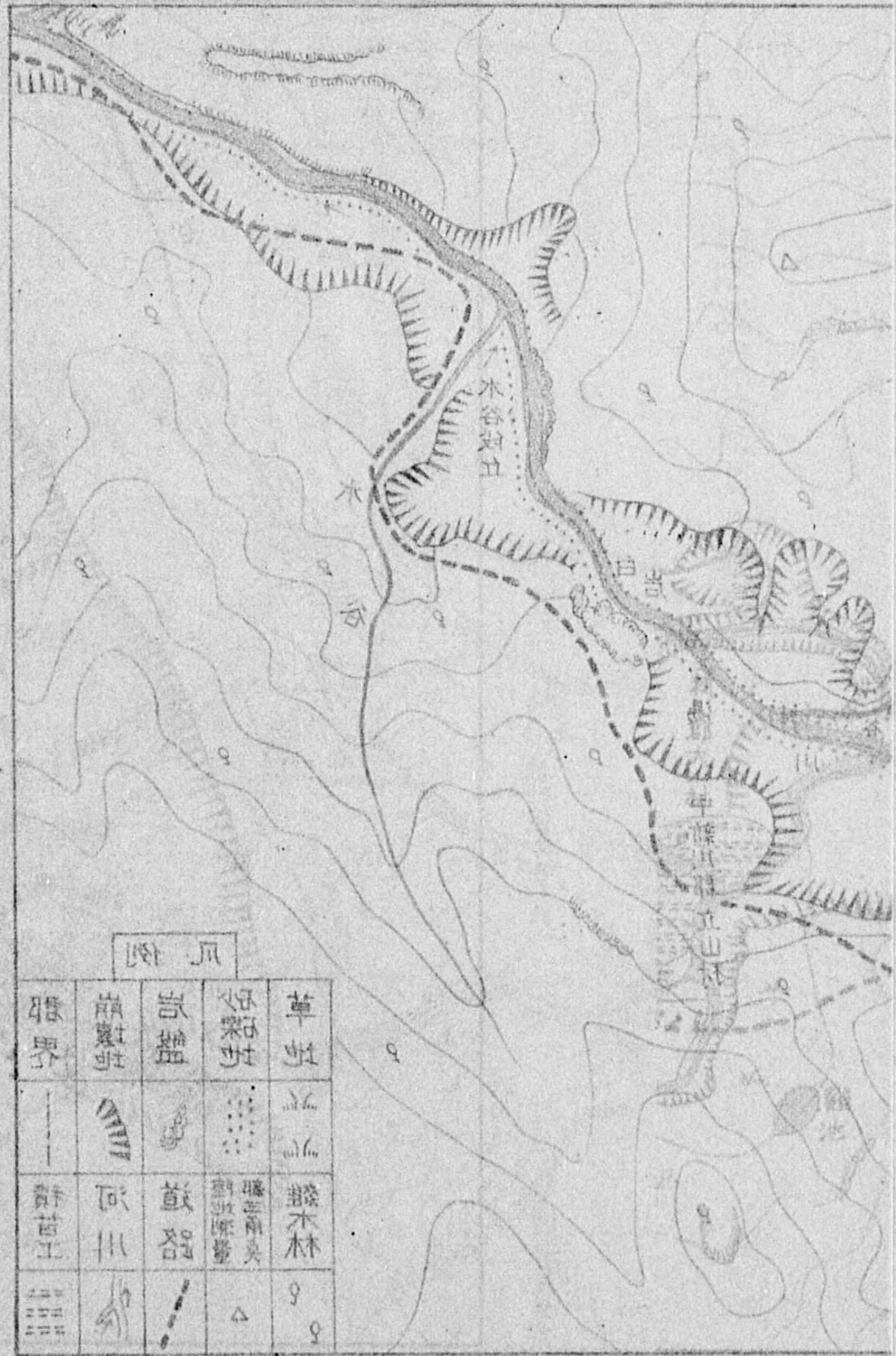
縮尺 二万分の一



(八) 砂防指定地ト水源地取締規則並ニ水源地ノ買収

砂防工事ニ着手スルニ當リ、常願寺川流域ノ一部及ビ小口、和田、稱名ノ各支川、並ニ其ノ小支、沿岸一帯ニ砂防法ヲ施行スルコト、シ、明治三十八年三月内務省告示第二四號ヲ以テ施行セラレ、設備地九千六百七十七町九反三畝歩、一定ノ行爲禁止制限地一萬五千七百六反五畝歩ニ達シ、本川ノ分水界ヲ以テ大体ノ施

圖 平 域



行區域トセリ。

扱テ、水源ヨリ砂礫ノ流出夥シキ原因ハ素ヨリ安政ノ震災ニアリト雖、石灰石ノ探掘、雑畑、又ハ森林ノ濫伐等、之レヲ誘致セルハ明カナリ。然ルニ、或ル一局部ニ對シテハ、保安林ニ編入シ、其ノ濫伐ヲ制限セリトモ、其ノ他ノ森林ニ對シ、取締ノ制ナキ時ハ、猥リニ森林ヲ伐採シ、又ハ、急峻ナル山腹ニ雑畑ヲ開拓シ、或ハ、木炭用ノ木材ヲ落下シ、石灰石ノ探掘等、土砂流出ノ因ヲ爲ス所爲尠カラズ。依而明治三十八年五月十二日縣令第二十一號ヲ以テ、砂防指定地取締規則ヲ公布シ荒廢ノ諸原因ヲ排除シ、且ツ常願寺川水系ニ於ケル縣營發電工事ノ進展ト共ニ、水源涵養ノ一日モ措クベカラザル實況ニ迫リ、大正九年ニ三十萬圓ノ巨額ヲ投ジテ、上流山地一萬四千余町歩ヲ買收シ、森林ノ育成ニ盡力シ、今日ニ至レリ。因ニ、保安林反別ハ、本流域ニ於テ二萬七千九百八町歩ナリトス。

(二) 工費豫算並ニ施行計畫ト其ノ變遷

扱テ、砂防調査ノ結果、小柴第三區土木監督署長ノ指示ヲ受ケ、堰堤工、護岸工、積苗工ノ諸工事ヲ併合施行スルモノトナシ、當時豫算六十萬六千余圓ヲ計上シ、施行ノ緩急ニ應ジ、之レヲ甲乙丙ノ三種ニ分チタリ。其ノ内急施ヲ要スベキ甲ニ屬スル工費ハ、四十八萬五千五百余圓ニシテ、之レヲ二十年繼續事業トシテ完了スルコトトシ、乙丙ニ屬スル諸工事ハ後日ニ讓ル事トセリ。此レ即チ當初豫算ニシテ、主トシテ湯川筋ノ施工ナリ。

斯クテ、明治三十九年以降、立山砂防事務所ヲ立山溫泉場ニ設ケ着工ノ運ビトナレリ。然ルニ、其後、地形ノ變動或ハ材料及ビ勞力費ノ騰貴ニ伴ヒ、當初計畫ヲ踏襲スルコトヲ得ザルニ至リ、大正四年度ヨリ、

四十四ヶ年計畫ニ變更ノ止ムナキニ至レリ。即チ當時ノ豫算總額ハ、百五十八萬圓ノ巨額ニ上レリ。大正六年十一月、井上知事ハ湯川筋ノ崩壊、日ト共ニ擴大シ止マル所ナキヲ嘆ジ、常願寺川上流砂防工事費國庫支辨ニ關スル件、左記趣旨ニヨリ、内務大臣ニ稟請セリ。

一、常願寺川ハ、本縣ノ中部ヲ縱斷スル巨流ニシテ、水害ハ歲々絶ユル事ナク、明治二十四年ニ百餘萬圓ヲ投ジテ、改修工事ヲ施行シ、更ニ、大正三年ノ災害ニヨリ、四十餘萬圓ノ復舊工費ヲ要シ、其ノ他ニ支出シタル災害費ハ枚擧スベカラズ。然ルニ、該川ハ常ニ土砂ノ堆積夥シク、今ヤ其ノ河床ハ田面ヨリ高キ事一丈餘尺ニ及ビ、再ビ、大改修ヲ施行スルノ已ムナキ現況ニ迫レルヲ以テ、本年九月第二期河川ニ編入方ヲ稟請セリ。

二、右稟請ニ伴フ必要條件トシテ、上流立山砂防工事ヲ施行スルハ、實ニ、緊急己ムヲ得サル次第ニテ該川ハ高峻ナル立山連峰ヨリ急轉直下、富山灣ニ注入ス。安政五年ノ大震災ニヨリ、水源大鳶山ニ大崩壊ヲ生ゼシ以來、荒廢其ノ極ニ達シ、禿山、赭岳相連リ、融雪又ハ降雨ハ、常ニ疎鬆ナル土壞ヲ崩シテ猛烈ニ地内ヲ剝キ、山骨ヲ削ルノ慘狀ヲ呈シ、之レガ爲メニ、曩ニ砂防計畫ヲ立テ、明治三十九年度以來、國庫ノ補助ヲ得テ水源地ニ砂防工事ヲ施行シタル工費額ハ、約五十萬圓ニ達セリ。然ルニ、尙、前途遼遠ニシテ、現今ノ如キ小計畫ニテハ、水源ヲ治ムル事殆ド不可能ナリト信ズ。若シ其ノ計畫ヲ擴大セハ、現ニ土木事業ノ爲メ過重ナル負擔ニ苦シミツ、アル本縣ノ財力ニ對シ、到底其ノ完成ヲ期シ難シ。常願寺川ハ、國土保全上、既ニ國ノ事業トシテ改修セラル、以上ハ、之レト離ルベカラザル關係ヲ有スル立山砂防工事ハ、先ヅ以テ政府ニ於テ特別施行ヲ仰ギ度旨稟請セ

リ。

三、常願寺川改修工事ヲ實施セラル、ハ、多少ノ時日アルベシト雖、其ノ効果ヲ全タカラシメンガ爲メ相當年月ヲ要スル砂防工事ハ、今ヨリ其ノ規模ヲ擴張シ、至急施設ノ要アルモノト認ム。

此ノ間、砂防工事施工ノ實蹟ニ鑑ミ、幾多ノ經驗ト研究ニ基キ、實地ヲ再三踏査シ、大正七年ニ三十五ヶ年計畫ヲ樹立シ、工費年度割九萬圓ヲ支出スルモノトシ、總額百十五萬圓ヲ計上セリ。此ノ方針ヲ以テ、銳意工事ノ進捗ヲ圖リタルモ、大正八年度ノ災害ニ罹リ、終ニ中絶ノ止ムナキニ至レリ。乃チ、白岩堰堤ノ復舊ニ全力ヲ傾ケタリシニ、大正十一年七月、出シ原谷ノ大崩壊ニヨリ、再三罹災ノ厄ニ遭ヒ、堰堤ハ根底ヨリ破壊セラレタリ。然ルニ當時、河底泥濘深クシテ、復舊工事ニ着手スル事至難ナリシカバ、西ノ谷ニ於テ堰堤工事ヲ施行シ來リタルモ、大正十五年、直轄事業トナリタルヲ以テ縣工事ヲ中止セリ。政府ニ於テハ、先ヅ白岩堰堤ヲ復舊シテ全工事ノ基礎ヲラシムベク、銳意施工中ニシテ、近ク大堰堤ノ竣功ヲ見ントシツ、アル現況ナリ。

次ニ當初施工ニ際シテハ、先ヅ水源地ヲ治ムル方針ノ下ニ着工シ、主トシテ、湯谷、金山谷、泥谷等ニ施工シ來リタルモ、大正四年度ヨリ、専ラ湯川本流並ニ出シ原溪流ノ堰堤工事ニ主力ヲ注グ事ニ方針ヲ改メ先ヅ白岩附近ニ基礎堰堤ヲ築設スルノ計畫ヲ樹テ、之レニ着工シ竣功ヲ俟ツテ其ノ他數多ノ堰堤ヲ築造シ、業績顯著ナリシガ、數度ノ罹災ニヨリ此等ノ諸工事ハ、根底ヨリ流失セルモ、以後今日ニ至ル迄、此ノ計畫ヲ踏襲シ、工事ノ進捗ヲ圖リツ、アリ。

(2) 立山砂防區域ノ狀況

(1) 地 質

當今、立山砂防區域ト稱スルハ、湯川流域ノ崩壊地ヲ指スモノナル事ハ、既ニ述ベタル所ニシテ「日本北アルプス」ノ中樞ニ位スル立山温泉ヲ中心トシ一里ノ半徑内ニ於ケル一帯ノ地域ナリ。附近ハ立山火山系ニ屬スル峻峰連ナリ、即チ東ニハ淨土、龍王、俄鬼、獅子ノ諸岳、南ニハ鷲羽、鳶ノ諸連山、北ハ彌陀ケ原高原ノ懸崖ニ接ス。

本區域ハ、第三紀火山活動期ニ於ケル大噴火口ノ遺跡ナリト稱セラレ（立山ノ大噴火ニ就テハ、有史以前ノ事ナレハ詳ナラズ。史上ニ現ハレタル所ハ慶雲元年ニ立山ノ西部爆裂シ、天保十年四月二十九日ニハ、現時ノ地獄谷ノ爆破ヲ傳フルノミ）今日周圍ヲ繞ル諸嶽ハ、其ノ外輪山ニシテ、噴出セル熔岩ハ、東ニ流レテハ五色ケ原ヲ形成シ、北西ニ流レテハ、彌陀ケ原ヲ型リ、更ニ遙カ立山村千垣地先ニ及ベリ。往古ノ壯觀想像スルニ足ルベシ。然ルニ地變ヲ得テ休火口トナルヤ、碧水ヲ湛ヘシガ、白岩附近ノ鞍部ヨリノ溢水ハ、漸次浸蝕シ、終ニ今日ノ湯川ヲ形成セシモノナルベシ。サレバ、附近山腹ヨリハ、四時硫氣ヲ發散シ、岩石ヲ腐蝕分解シテ止マズ、水蒸氣濛々トシテ立チ上レリ。出シ原池、刈込池、古池、新湯等ハ當時ニ於ケル火口ノ遺跡ナリ。殊ニ新湯ノ如キハ稀ニ見ル間歇温泉ニシテ、附近ヨリ産スル玉滴石ハ、有史以前ヨリノ存在ヲ如實ニ語ルモノニシテ、立山温泉ヲ始トシ、諸所ニ熱泉ノ涌出ヲ見ル。而シテ鳶山一帯ハ、三層ヨリナリ、下層ハ最モ古ク、中層ハ、第一期古成層ニ屬スル花崗片磨岩ニシテ、

僅カニ、湯川筋白岩附近並ニ出シ原谷崩壊地ノ一部ニ其ノ露出ヲ見ルノミ。上層ハ火山灰ノ堆積ニシテ、上面ハ安山岩ニヨリ形成セラレ、第四紀層ニ屬シ、地盤極メテ脆弱ナリ。然ルニ、安政ノ震災ニ崩壊ノ端緒ヲ得タル地層ハ、硫化作用並ニ風化作用ノ爲メ結合カヲ失ヒ、四時崩落シテ止ム時ナク、湯川筋沿岸ハ其ノ分水界ヲ境トシ、悉ク禿嶺ノ崩壊地トナリス。

(ロ) 氣 象

立山砂防事務所附近ハ、盛夏ノ候ト雖、尙朝夕ノ氣温華氏六十度ニ及バズ、日中ト雖、八十度ヲ越スコト極メテ稀ニシテ、時々襲來スル濃霧ニ至リテハ、咫尺ヲ辨ゼズ。斯ル時ハ、氣温忽チ降下シ、激變常ナク雨量ハ比較的多量ニシテ、六月及ビ九月ノ雨季ニ於テ特ニ然リトス。彼ノ大正八年七月七日ノ災害當日ノ如キハ、日雨量、實ニ二百五十三耗ニ達セリ。次ニ、標高海拔四千餘尺ノ地點ナレハ、降雪期又早ク、普通十一月月上旬ニテ積雪アリ、冬期ハ其ノ量二十餘尺ニ達シ、六月ニ至ラザレハ融雪スル事ナシ。故ニ工事ノ施行期間ハ極メテ短ク、作業困難ナリ。尙冬季最低温度ハ攝氏零點以下十六、七度ヲ普通トスルモ、大正十二年度ノ如キハ、實ニ二十一度ニ達セリ。

(ハ) 荒 廢 狀 况

火山噴出物ニヨリ構成セラレタル軟弱ナル地盤ノ本區域ハ、已ニ述ベタルガ如キ狀況ニテ、硫化作用ニヨリテ岩石ハ腐蝕分解シ、風雪氷霜ノ風化作用モ加ハリ、自然的ニ山岳ノ崩壊ヲ助成ス。試ニ立山登山口、藤橋ニ輕車ヲ捨テ、綠陰ニ鶯聲ヲ聞キツ、常願寺川ヲ溯行セン。先ヅ目ヲ眼下ノ河流ニ注ゲハ、河床ノ荒廢甚シク、亂流常ナキ狀況ヲ觀取スルヲ得ベシ。湖ルニ從ヒテ、愈々其ノ狀態ノ顯著ニ

シテ山地ノ慘狀ヲ想到セシム。終ニ、鬼ヶ城ノ崩壊地ニ到ラハ、萬人、其ノ慘狀ヲ眺望シ、一日モ砂防設備ノ忽諸ニ附スベカラザルヲ痛感スベシ。宜ナリ、數萬坪ノ土石崩落シテ本流ヲ堰キタルコト幾十度ナルヲ知ラズ。近クハ、大正九年及ビ大正十一年ノ崩壊ノ如キハ、數日間常願寺川本流ヲ湛ヘ、下流人心ノ動搖甚シカリシ事實ハ、今尙記憶ニ新ナル所ナルベシ。更ニ杖ヲ進メ、湯川眞川ノ合流點ニ到リ、右顧スレハ、湯川ヲ隔テ、眞川ノ崩壊狀況ノ一部ヲ、指呼ノ間ニ望ムベク、左視セハ、水谷段丘ノ荒廢極レル狀ヲ望ムベシ。次デ歩ヲ、湯川筋ノ白岩附近ニ移サン。上下流ノ兩岸、視界ノ許ス限り、一草一木ダニナキ斷崖數百尺ノ崩壊地ニシテ、秃嶺ノ屹峯到ル處ニ聳立シ、奇觀類例ナカルベク、更ニ、立山溫泉ニ杖ヲ留メ齋山並ニ松平谷方面ヲ望メハ、直立數百尺ノ山岳崩壊シ、屹乎トシテ雲間ニ聳ユ、荒廢ノ極致ヲナシ、晴天ト雖、四時轟々トシテ崩落土石ノ騒音ヲ聞クノミニシテ、年中殆ド溪流ノ清澄ナルヲ見ズ。殊ニ雨天ニ際セハ、湯川沿岸一里餘ニ亘ル荒地、並ニ齋山一帶一里ニ垂ントスル崩壊地ハ一時ニ崩レ、化シテ糊狀ノ泥流トナリ、土烟ヲ吹キ石火ヲ散ラシテ流下シ、時ニハ萬貫ノ巨岩ヲ浮游セシメツ、押シ流ス狀ハ、只悽慘ト絶叫セシムル許リナリ。從テ、此等土石ノタメ流路定ラズ、沿岸到ル處ニ流身激突シ、山脚ヲ浸蝕ナシ、益々崩壊ヲ容易ナラシメ、慘害ヲ逞フス。特ニ、時々惹起スル大小崩壊ハ、湯川本流ヲ堰キ止メ、洪水數日ニ及ブ事珍シカラズ。今最近ノ事例ヲ掲グレハ、昭和八年五月二十四日、湯川筋右岸水谷ニ於テ、十萬坪ノ土石崩落シ、又同十一年六月十七日ニハ、同川右岸出シ原谷合流點ニ於テ三萬四千坪、同年八月七日ニハ、同川右岸泥谷合流點附近ニ於テ三萬四千坪ノ崩壊アリ、何レモ數日間、河水ヲ堰キ止メ、終ニ其ノ土石ハ下流ニ流出シ、常願寺川沿岸ニ相當ノ被害ヲ蒙ラシメヌ。以上ハ單ニ湯川筋ニ惹起セル事故ノ

ミナルガ、他ハ推シテ知ルベク、慘害ノ甚大ナルヲ想起セハ只人心ヲシテ寒膽セシムルノミ。
區域ノ廣大ニシテ且ツ慘憺タル荒廢！實ニ、世界的砂防ナル哉！

(二) 崩壊ノ原因

立山砂防區域ノ荒廢セル原因ハ、一ニ安政五年二月ノ大震災ニアリトス。即チ、舊火口壁ヲ成セル齋山ヲ始メ、天狗平、國見岳ノ大崩壊、並ニ眞川筋、常願寺川筋ニ幾多崩壊地ヲ生ゼシ結果ニシテ、昔時ハ、綠濃キ森林多ク、齋山ノ如キハ、鬱蒼タル草木繁茂シ、湯川ニ面シテ直立ナシ、完全ナル火口壁ヲナシタリト云フ。就中崩壊ノ最モ慘狀ヲ呈シタルハ齋山一帶ニシテ、湯川本流ヲ埋塞シ、立山溫泉場ヨリ上流一帶ニ瀦水スルコト數旬、終ニ、崩壊土ト飽和シ、一大泥流トナリ、一時ニ下流ニ押流シタルモノ、如シ。水谷附近ノ段丘ハ、其ノ際ニ於ケル泥流ノ遺物ニシテ、當時ヲ追憶スル好個ノ資料ナリ。爾來、山地崩壊ノ轟キ止マズ、河底ハ浸蝕セラレ、亂流岸ヲ犯シ、地盤ノ弛緩ト共ニ崩壊ヲ助成シ、降雨毎ニ泥濘化シテ流下スル土石ハ、其ノ量幾程ナルヤ知ルベクモアラズ。サレハ、之レヲ流下スル常願寺川ノ河狀ハ險惡トナリ、豹變シテ昔日ノ觀ナク、流下スル無限ノ土石ノ爲メ災害相亞イデ起リ、一市二郡ノ住民ヲシテ安堵ノ日時ナキニ至ラシム。

次ニ、安政ノ震災ニ就キ少シク述ベン。

(ホ) 安政五年ノ震災

安政五年二月二十六日午前一時ノ大震災ハ、越前ヨリ越中ニ及ビ、越中國ニアリテハ、富山城内ノ石垣及塀、矢柵等ヲ損壞シ、家屋ハ潰レ、大樹ヲ倒シ、領内到ル處土地裂ケ、砂水噴出シ、被害夥シク、就中、

立山火山系中、大鷲山、小鷲山一帶ノ大崩壊ヲ來シ、湯川、眞川ノ水流ヲ諸所ニ埋塞シヌ。爾來、鳴動止マズ、下流一帶ノ人心、動搖甚シク、時ノ藩主ヲ始メトシ、庶民一同各自ニ家財ヲ纏メ、安養坊山ニ避難スルモノ引キモ切ラズ。延ヒテ三月十日小震アリ、鷲山麓ノ瀦水、之レガ爲メニ、甫メテ流出シ、一大泥流トナリ、幾百千ノ巨石ヲ浮游シツ、流下シ、上瀧町地先ニ至リ平野ニ押シ擴メラレ、一朝ニシテ桑田化シテ泥海トナリス。其ノ後濁流連日止マザリシガ、四月二十六日ニ至リ、再ビ、大泥流トナリテ一時ニ流下シ、泥砂岩塊ノ流出最モ夥シク、沿岸ニ氾濫シ、終ニ、金澤藩領内ニ於テ浸水スルコト百四十八ヶ村ニ達シ、家屋千六百十二戸、土藏八百九十六棟ヲ流失シ、溺死者百四十餘名ヲ算シ、富山藩領内ノ被害十八ヶ村ニ達セリ。從而堤防、護岸ハ固ヨリ、耕地等悉ク流失シテ痕跡モナク、全ク荒野ト化シ終リス。今尙下流各所ニ點在セル大石ハ當時ノ遺物ニシテ、如何ニ慘憺タルモノアリシカヲ現實ニ譚ル好資料ニシテ、尙新庄ニ現存セル石燈籠ハ、曠野ト化シタル災害地ヲ往復スル住民ノタメ、夜間ノ目標トシテ建設セラレタルモノ、一基ナリ。尙此ノ地變ニヨリ、古池ノ如キハ枯渴シ、新ニ鱒池ヲ生ゼリ。於是、藩主ハ、人民持高ノ割合ニ應ジ、二ヶ年間免租シタルノミナラズ、米、味噌及ビ塩ヲ給シ、開墾ニ當リテハ、反ニ付幾何カノ料金ヲ賜ハリ、大ニ救恤ニ努メタリト云フ。

其ノ被害ノ範圍ハ、東方ハ立山村、大森村、舟橋村ヲ貫キ、白岩川ヲ境トシテ東水橋、西水橋ノ兩町ヲ犯シ、西方ハ上瀧町ヨリ舳川ノ線ニ沿ヒテ富山市ニ及ビ、此ヨリ海ニ至ル一帶ノ町村ナリトス。

別紙附録ニ「安政五年戊午二月ノ震災ニ關スル舊記拔萃」ヲ記シテ當時ヲ便トセン。

(3) 砂防工事及其ノ成績

(1) 縣營工事ノ大要ト其ノ結果

明治三十八年、砂防調査完了ト共ニ、直チニ砂防工事ヲ起工スル事トシ、同三十九年度ヨリ大正十五年度ニ至ル二十有一年間、國庫補助ヲ得テ執行セル事業ハ、先ヅ諸溪流ヲ治ムル方針ノ下ニ、出シ原谷、泥谷、金山谷、湯谷等ノ水源ニ着工セシガ、是等工事ノ進捗ト共ニ、大正四年以後ハ専ラ堰堤工事ヲ施工スル事トシ、湯川本流、出シ原溪谷等ニ工ヲ起シ、且ツ、材料運搬及ビ物資ノ供給ヲ圓滑ニシテ、材料費並ニ勞力費ノ遞減ヲ圖ラン爲メ、大正五年ヨリ二ヶ年繼續事業トシ、延長五里ニ餘ル専用道路ヲ開鑿シ、銳意設備ノ完成ヲ期シタル爲メ、相當成績ノ見ルベキモノアリタリト雖、設備地九千餘町歩ニ對シ、完成セシ反別ハ、僅ニ、三十町歩ニ過ギズ、誠ニ九牛一毛ノ感ヲ深カラシメヌ。其ノ工法ハ、湯谷、金山谷、泥谷、出シ原谷、西ノ谷、及ビ新谷ニハ、積苗工(主トシテ萱株ヲ植栽シ、落葉松ヲ併植シテ森林ノ造成ヲ計レリ)水路張石工、護岸石積工、床固石積工、石堰堤工ヲ築造シ、湯川本流及ビ出シ原溪流ニアリテハ、練積堰堤工事ヲ施工セシガ、此ノ基本的工事ノ進捗ト共ニ、効果愈々著シキヲ認メラレシモ、不幸ニシテ湯川本流ノ練積堰堤五ヶ所ハ、出シ原谷ニ於ケル數多ノ階段式堰堤ト共ニ、大正八年七月六日ノ災害ニ罹リ欠潰シ、砂防工事施行上大打撃ヲ被リタルハ、實ニ痛痕事タリ。

就中、白岩堰堤ハ、湯川筋唯一ノ岩盤露出地ヲ撰定シ、右岸水通シハ、基礎ヲ堅固ナル岩礁ニ密着シ、練積トナシ、左岸袖部ハ、又堅牢ナル凝灰岩ニ取り付ケ、全工事ノ基礎堰堤トシテ築造シ、貯砂並ニ河床勾

配ノ安定ヲ保持シ、實蹟著大ナリシニ、此ノ厄ニ遭ヒ見ル影モナク破碎シ、而モ、河床地盤ハ百尺餘低下セルハ惜シムベシ。斯クテ本區域ノ既設工事ノ安定ニ對シ、著シキ脅威ヲ感ゼシヲ以テ、大正九年度ヨリ三ヶ年繼續事業トシテ復舊スベク、工費二十三萬餘圓ヲ計上シ、混凝土堰堤施工ノ計ヲ立テ、主力ヲ之レニ注ギ、已ニ八分ノ出來トナリシガ、十一年七月五日ノ豪雨ハ、出シ原二ノ谷頂上ニ於テ長百間幅五十間高サ十間ノ大崩壊ヲ起シ、俄然、高サ三十餘尺ノ土石流トナリテ奔下セルニ遭ヒ、之レガ大部ヲ破潰シ、翌六日ニハ、出シ原谷火山灰地層ノ弛緩ニヨリ、湯川合流點ヨリ約百間上流ノ個所ニ於テ大崩壊ヲ起シ、其ノ泥土ハ、高サ六十尺ノ山海嘯トナリテ激突シ、遂ニ、白岩堰堤ヲ始メ、殘餘ノ堰堤ヲ根底ヨリ破壊シ盡クセリ。出シ原谷、湯川合流點ニ現存セル小段丘ハ、其ノ際ニ於ケル泥流ノ遺跡ニシテ、崩壊ニヨリ、新ニ生ジタル谷ヲ大正谷ト名ヅケタリ。

顧レハ、十七ヶ年ノ星霜ト巨萬ノ富ヲ費シ、貴重ナル犠牲者十六名、重傷者七十八名ヲ數ヘ、孜々トシテ竭シタル努力ヲ、一朝ニシテ水泡ニ歸シタル憾ハ、實ニ骨髓ニ徹セリ。

次ニ遺憾トスル所ハ泥谷ニ於ケル諸工事ノ罹災ナリトス。本溪谷ハ、砂防工事ノ起工ト共ニ着手シ、十四萬餘圓ノ工費ヲ投ジ、已ニ完成シ、往年ハ年中泥流ノ止ム時ナカリシモ、竣工ト共ニ溪流ハ常ニ清ク澄ミ、沿岸ノ植林モ亦、漸ク繁茂ノ域ニ達セリ。元來、本溪谷ノ水源ハ火山灰層ニシテ、到ル所硫氣立チ昇リ、軟弱極ル地質ニシテ植樹ハ悉ク枯死スルヲ以テ、専ラ石積工ヲ採用シ、周到ニ工事ヲ施工セリ。然ルニ昭和二年六月十六日及ビ同四年五月十四日ノ二回ニ亘ル水源ノ崩壊ハ、此等ノ諸工事ヲ始メ、沿岸一帯ノ既設工事ヲ根底ヨリ失ハシメ、河底ハ浸蝕セラレテ三十餘尺ノ低下ヲ來シヌ。爾來、日ト共ニ溪流ノ狀

態險惡トナリ、益々沿岸ノ崩壊激甚トナル傾向アリタルヲ以テ、先ヅ、下流部ヨリ復舊スル計畫ヲ樹テ、上流地帯ハ地盤固定セザルヲ以テ、其ノ時期ヲ待チ起工スル事トシ、混凝土堰堤二十二ヶ所、並ニ練積護岸、山腹工施行ノ計畫ニテ、工費三十八萬圓ヲ計上シ、國庫補助ヲ得テ、昭和五年度ヨリ三ヶ年繼續事業トシテ施行シ、之レガ執行ヲ内務省ニ委託シ、本邦稀ニ見ル階段式砂防堰堤トシテ已ニ竣功セシヲ以テ、漸ク愁眉ヲ開クヲ得タリ。

水源山地ノ砂防工事ハ前述ノ狀況ニシテ、欠潰セル白岩堰堤ハ國營工事（後述）トシテ築造中ナリト雖、同所ヨリ下流ニハ、水谷、鬼ヶ城及ビ眞川流域等ノ大崩壊地アルヲ以テ、土砂扞止ノ目的尙達セラレザル憾アリ。仍テ縣ニ於テハ、大山村本宮地先ノ、兩岸岩盤ノ相迫ル狹窄部ニシテ、而モ上流ニハ、廣濶ナル絶好ノ貯砂地ヲ有スル個所ニ、昭和十年度ニ、工費五十萬圓ヲ以テ、高二十二米、天場長百十米、底長八十一米五十糎、堤体三萬五千立米ノ砂防堰堤ヲ築造セリ。本堰堤ハ、常願寺川改修計畫ノ一部ヲナシ、將來同川改修計畫ニ基キ施工セラル、諸堰堤ト連繫シ、全計畫ノ達成ニ重要ナル關係ヲ有スルモノナリ。

(ロ) 國營砂防工事

工費莫大ニシテ施工困難ナル立山砂防工事ハ、夙ニ國營タラン事ヲ要望シ、縣ニ於テハ、沿岸町村ニヨリ組織セル常願寺川治水同盟會ト連絡シ、數十回ニ亘リテ政府ニ實狀ヲ具陳シ來リタル所、其ノ機ヲ得テ、終ニ、大正十五年度ヨリ内務省直轄事業トシテ施行セラル、事トナリ、同年度ヨリ着工、全工事ノ根底ヲナス白岩堰堤工事ニ力ヲ盡シ、今ヤ竣功モ餘日ナキニ至レリ。同堰堤ハ、高サ二百三十餘尺、堤体一萬五千立坪、此レニ接續スル高百三十二尺、長七十七間ノ護岸ト共ニ、世界ニ誇ルベキ大砂防堰堤ナリ。然ル

ニ昭和六年度以降、年度割額改訂ト共ニ、當初豫算減額セラレシ爲メ、白岩堰堤ノ築造ヲ以テ休工シ、殘餘ノ諸工事ハ、起工ノ運トナラザル状態トナリス。

(4) 砂防工事費

(イ) 縣營工事費

明治三十九年以來、國庫補助ヲ得テ投ジタル砂防工事費ハ、百餘萬圓ニ達シ、此ノ外、泥谷災害復舊費三十八萬圓、及ビ常願寺川筋本宮地先ニ施行セル堰堤ノ工費五十萬圓等アリテ、計金百八十八萬餘圓ノ巨額ニ達ス。砂防工費ノ内譯次ノ如シ。

自明治三十九年度
至昭和四年度

一金九十萬四千四百十三圓七十錢三厘(竣功額)

國庫補助關係

内

金三十六萬六千二百四十一圓四十一錢八厘

國庫補助額

金五十三萬八千七百七十二圓二十八錢五厘

一金十萬九千五百九十八圓

縣負擔額
單獨縣費

内

金八萬八千八百六十四圓五十一錢

經常費

金二萬七百三十三圓四十九錢

臨時費

計金百〇一萬四千一百七十錢三厘

以上記スル所ハ精算額ニシテ、其ノ内國庫補助關係ハ、大正十四年度迄ニシテ、單獨縣費ハ昭和四年度迄ナリトス。

(ロ) 國營工事費

大正十五年度ヨリ昭和九年度ニ至ル九ケ年繼續事業トシテ、總工費三百萬圓(内縣負擔九十一萬二千圓)ヲ以テ、國ニ於テ着工セラレタル砂防工事ハ、昭和六年度以降、年度割改訂ニ伴ヒ、工期ヲ五ケ年延長シ工費七十七萬九千七百三十八圓ヲ減ジ、總工費二百二十二萬二百六十二圓(内縣負擔金七十三萬六千九百四十五圓)ヲ以テ施行セラレ、昭和十四年度ニ於テ竣工セリ、更ニ昭和十五年度ヨリ四ケ年ノ繼續費トシテ百萬圓(内縣費負擔三分ノ一)ヲ計上シ目下白岩堰堤上流ノ砂防工事ヲ執行シツ、アリ

(5) 將來ノ砂防工事

縣ニ於テ施行シタル砂防工事ハ、既ニ述ベタルガ如ク、多年辛酸ノ甲斐アリテ、漸ク其ノ効果ヲ收メントスルトキ恰モ大正八年及ビ同十一年ノ大災害ニ於テ、西ノ谷、新谷、並ニ湯谷ノ工事ヲ除キ、其ノ他ノ工事ハ根底ヨリ破壊シ盡クサレヌ。特ニ湯川筋並ニ出シ原谷ノ諸工事ハ、最も重要ナル設備ナリシヲ以テ、將來ノ企劃ニ影響スル所甚大ナルノミナラズ、再ビ昔時ノ狀ニ還ラム事ヲ恐レタリシガ、幸ニシテ本工事ハ、國營ヲ以テ施行セラル、事トナリ、先ヅ、基礎工事トシテ、全國無比ノ企劃ニヨリ白岩堰堤ニ着工セ

ラレ、昭和十五年三月末日ヲ以テ竣功シタルハ誠ニ欣バシキ限リナリ。本堰堤ニ依ル貯砂量ハ百萬立方米（約十六萬六千六百立方坪）ノ計畫ナルモ、目下既ニ、豫定ノ大半ハ堰堤ノ背後ニ堆積シ、殆ンド貯砂ノ餘裕ナキ状態ニ立至レリ。然ルニ間斷ナキ大小崩壊ニ伴ヒ、流出スル夥シキ土砂ハ、日ナラズシテ前記堰堤ノ貯砂區域ニ充滿シ、餘砂ハ堰堤ヲ越流スルニ至ルベシ、而シテ本堰堤ノ目的タルヤ單ニ貯砂ノミニ非ズシテ今後上流水源ニ施行セラルベキ砂防工事ノ基礎タルベキモノナルガ故ニ、今後尙上流ニ於テ崩壊防止ノ諸工事を續行セズンバ、往年ニ異ナラザル結果ヲ生ズベシ、此レ縣民ノ均シク傍觀シ能ハザル所ニシテ常願寺川改修工事モ、既ニ昭和十一年度ヨリ國營ヲ以テ着工セラレタリト雖、砂防工事を閑却セハ、其ノ成果ニ及ス影響甚大ナルモノアリト思慮セラレタルヲ以テ、縣當局共々現狀ヲ再三具申ノ結果昭和十五年度ヨリ十八年度ニ至ル、四ケ年ノ第二期繼續事業トシテ、竣功セル白岩堰堤ヨリ、上流ノ砂防工事を再ビ國營ニテ續行スルコト、ナリ、目下着々其ノ進捗ヲ見ツ、アルハ縣民一同ノ欣幸トスル處ナリ。

惟フニ、立山砂防工事ハ、施工區域ノ宏大ニシテ、且ツ慘憺タル荒廢ノ狀ハ、他ニ比ナク巷間ニ世界的砂防工事ナリト稱セラル、所以モ亦、此處ニ存セリ、サレハ一堰堤ノ竣功ヲ以テ、能ク効ヲ奏シタリトハ、何人モ肯ズル所ニアラザルベシ。即チ尙、湯川本流、出シ原谷、泥谷、西ノ谷等ニ於テ、堰堤工事ニ護岸工事ニ、或ヒハ山腹工事ニ、夫レ々々相當ナル諸工事を執行スルト共ニ下流上瀧地内ニ至ル常願寺川本流ニモ相當ノ砂防堰堤ヲ築造スルヲ要シ、而シテ之レガ完成ヲ期シテ後、始メテ立山砂防ノ大工事を完了シ得タルモノト稱セラルベク、一ニハ國土保全ノ目的ヲ達シニハ、縣民安堵ノ境ヲ得タリト云フヲ得ベシ。如斯状態ニ在ルヲ以テ、吾等縣民ハ、立山大砂防工事完成ヲ一日モ速カナラン事ヲ待望シテ歇マザル次第ナリ。

以上

ラレ、昭和十五年三月末日ヲ以テ竣功シタルハ誠ニ欣バシキ限リナリ。本堰堤ニ依ル貯砂量ハ百萬立方米（約十六萬六千六百立坪）ノ計畫ナルモ、目下既ニ、豫定ノ大半ハ堰堤ノ背後ニ堆積シ、殆ンド貯砂ノ餘裕ナキ状態ニ立至レリ。然レニ間斷ナキ大小崩壊ニ伴ヒ、流出スル砂シキ土砂ハ、日ナラズシテ前記堰堤ノ貯砂區域ニ充滿シ、餘砂ハ堰堤ヲ越流スルニ至レシ、而シテ本堰堤ノ目的タルヤ單ニ貯砂ノミニ非ズシテ今後上流水源ニ施行セラレマキ砂防工事ノ基礎タルニキモノナルガ故ニ、今後尙上流ニ於テ崩壊防止ノ諸工事ヲ續行セザンバ、往年ニ異ナラザル結果ヲ生ズシ、此レ縣民ノ均シク傍觀シ能ハザル所ニシテ常願寺川改修工事モ、既ニ昭和十一年度ヨリ國營ヲ以テ着工セラレタリト雖、砂防工事ヲ閑却セハ、其ノ成果ニ及ニ影響甚大ナルモノアリト思慮セラレタルヲ以テ、縣當局共々現狀ヲ再三其中ノ結果昭和十五年度ヨリ十八年度ニ至ル、四ヶ年ノ第二期繼續事業トシテ、竣功セル白岩堰堤ヨリ、上流ノ砂防工事ヲ再ビ國營ニテ續行スルコト、ナリ、目下着々其ノ進捗ヲ見ツ、アルハ縣民一同ノ欣幸トスル處ナリ。

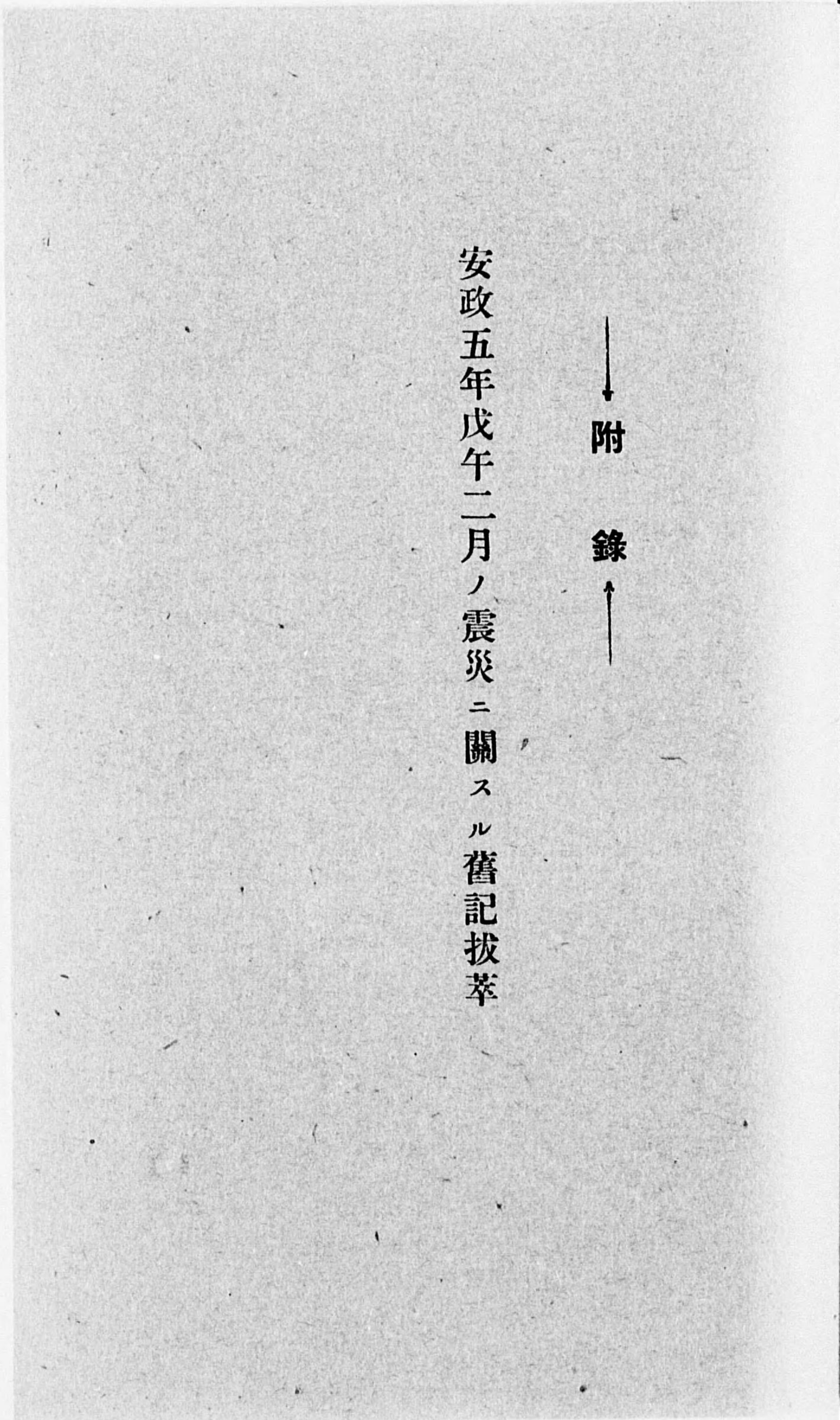
惟フニ、立山砂防工事ハ、施工區域ノ宏大ニシテ、且、慘憺ケル荒廢ノ狀ハ、他ニ比ナク甚間ニ世界的砂防工事ナリト稱セラレ、所以モ亦、此處ニ存セリ、サレハ、堰堤ノ竣功ヲ以テ、能ク効ヲ奏シタリトハ、何人モ肯ズル所ニアラザルベシ。即チ尙、湯川本流、出シ原谷、泥谷、西ノ谷等ニ於テ、堰堤工事ニ護岸工事ニ、或ヒハ山腹工事ニ、夫レハ、相當ナル諸工事ヲ執行スルト共ニ下流上流地内ニ至ル常願寺川本流ニモ相當ノ砂防堰堤ヲ築造スルヲ要シ、而シテ之レガ完成ヲ期シテ後、始メテ立山砂防ノ大工事ヲ完了シ得タルモノト稱セラレベク、一ニハ國土保全ノ目的ヲ達シニハ、縣民安堵ノ境ヲ得タリト云フヲ得ベシ。

如斯状態ニ在ルヲ以テ、吾等縣民ハ、立山大砂防工事完成ヲ一日モ速カナラン事ヲ待望シテ歎マザル次第ナリ。

以上

↓ 附 錄 ↑

安政五年戊午二月ノ震災ニ關スル舊記拔萃



安政五年戊午二月ノ震災ニ關スル舊記拔萃

安政五年二月二十六日午前一時ニ突如トシテ、惹起セル大地震ハ、越前、越中ニ亘ル地域ヲ震央トシテ近隣ノ地大イニ震ヒ、諸城市齊シク震害ヲ蒙リヌ。特ニ、我ガ富山縣ニ於テハ、其ノ被害最モ甚大ニシテ、立山火山系ノ一峰ヲナセシ大鷲山、小鷲山ノ連峰、大崩壞ヲ來シ、瀧水月余ニ及ヒ、延イテ、三月十日ノ小震ニヨリ一部欠潰、流出セルモ、二十六日ノ正午近ク、大泥流トナリテ押し出シ來リ、幾多ノ生命財産ヲ地底ニ葬リ、人心ヲシテ甚シク恐怖ニ戰カシメ、忘ルヘカラサル印象ヲ與ヘタリ。斯クテ、常願寺川流域荒廢ノ原因ヲ釀シ、治水上、幾多障害ノ瘤トナリ、一市二郡ノ住民ヲ、不安ノ境ヨリ脱スルヲ得サラシム。左ニ舊記ノ一部ヲ、拔萃シテ當時ノ慘狀ヲ偲ハント欲ス。尙、時日、字句ハ、可成、原文ノ儘ヲ記載スルニ努メタリ。

○ 前田(富山)家譜

安政五年二月二十五日夜、越中地大震、新川郡立山以南ノ大鷲山、大ニ崩レ、淵ヲ埋メ谷ヲ塞キ泉流通セズ、四月二十六日其ノ山間ノ瀧水潰決シ十里余ノ間破浪森漫、時ニ封内常願寺川邊ノ十ヶ村盡ク沙石ノ地トナル、爾後三年ノ間其窮民ニ米二千石餘分與シテ之ヲ賑救ス。

○ 前田氏家乘

安政五年二月地大ニ震シ、城中石垣崩壊シ、大樹倒レ、地裂ク。此ノ時大鷲山崩レ、常願寺川ヲ壅塞シ水流通セス。四月十一日怒流暴カニ至リ大石ヲ飛ハシ、淤泥ヲ奔ラス。上瀧村以北東岩瀬ニ至ル迄、人畜ノ死傷其ノ數ヲ知ラス。餘波我カ邑、稻荷町人家ヲ没シ、柳町天満宮社内ニ入り、鮎川架橋盡ク流没セリ。之レ大場堤決壊セシニヨル。最モ太田用水ハ我カ封内ニ關スル所ナリ。其ノ修築費千四百余兩、人夫五萬八千六百人余ナリ。罹災者ヲ救シテ一萬四百石ヲ免租シ、別ニ四月十六日ヨリ十二月晦日マテ千五百石ヲ給與ス。

前田氏家乘

安政六年正月、常願寺川前年災後ノ村民カ、食資ナキヲ憐ミ、猶、本年十二月マテ千二百石ヲ給與スヘキ旨命セラル。

安政五年留帳

口上ヲ以テ申上候、新川郡常願寺川上先月二十六日曉、八ツ頃、大地震ニテ山崩レ致シ、湯川上ニテ泊リ候處、當月十日未ノ刻頃ニ切レ申候ニ付岩石泥並ニ木呂多ク押シ出シ、同日申ノ刻迄ニ追々減水仕リ候ニ付、御田地大損ノ箇所左ニ申上候。

一、常願寺川西縁ニテ、大場村前ト申ストコロニテ、二十間三十間計リ三ヶ所入川ニ相成居申候、御田地損相成申候

一、同東縁ニテ利田村前ト申所ニテ、百間余入川致シ、針木村、淺生村、國重村、竹内村、北馬場村ヨリ白岩川下ニテ落合フ村々岸崩レ變地相成、此ノ村數兩縁十三四ヶ村計リ御田地大損シ相成居候

一、右村々家十三四軒計リ流失イタシ候

一、常願寺川筋、兩縁川除御普請所八分通り御座ナク候、切込此邊村々石岩砂泥並木呂多ク流出仕候、御田地多ク相損シ申候由ニ御座候

右ノ通私共見聞ノ所依テ御達申上候以上(午三月十二日)

當二十六日曉、八時頃大地震ニ付、新川山、拔損所等見聞ノ趣、左ノ通りニ御座候

一、岡田村藤懸山抜イタシ、往來長三十間計リ欠落、此ノ藤懸ト申ス往還ハ下山村ニ通行ノ一筋道ニテ當時右欠落候ヶ所、岩ニツナカリ漸ク通行仕候者モ御座候

一、中地山林ヨリ十一人龜谷山ヘ稼ニ登山イタシ居候者共罷歸申サス候、即死仕候哉ト奉存候得共死骸未タ見當リ申サス候

一、本宮村ノ者共二十七人、原村ヨリ四人都合三十一人立山下温泉湯元ヘ雇ハレ罷越居候處、是レマタ罷歸リ申サス候ニ付、當二十八日右二ヶ所ヨリ人足二十人相仕立テ鉾崎山マテ様子見受方ニ罷越見届候次第左ノ通りニ御座候

一、大トンベ、小トンベ兩山共過半崩落、且出シ原ノ新湯及温泉場小屋並松尾山等崩出シ、熊倒レト申ス山ノ絶頂ヘ打越、且大橋ノ向トチ木尾ト申ス山ノ東平邊迄押出シ、谷々ノ分チ無御座候、尤立木一本モ無之様ニ相成申候

一、伊土山續南平大抜イタシ候

一、松平ト申山殘ラス湯川マテ押出シ申候

一、湯川ヨリ南ノ方かりこみが池ノ方ニ當リ今更火烟リ上リ居候

一、巢こくと申山大抜ニテ眞川マテ押出シ一タン川留リ居候由ニ候へ共、只今處水ノマへ居候ケ所モ無之、川埋モレ川底高ク相成居候コトハ何百間トモ計リ難ク候

一、鬼ヶ城ト申所大ヘンナル大抜ケ仕候、其外山抜ケ所甚シク數知レ申サス候、前段湯ニ雇ハレ温泉へ罷越居候、三十一人ノ者共、必定即死仕候ト奉存候へ共未タ死骸相見ヘ申サス候

一、山方村々持山過半山抜ニテ立木無之様ニ相成、指當リ稼ギ方出來不申、且田畑同様大變ニ相成申候

一、御收納通道數十ヶ所山抜ニテ相續申候

一、常願寺川筋牧村領ニテ龜岩ノ邊迄大石等ニテ埋込ミ、小見村藤橋兩詰ノ鳥居高サ三間モ有之候處理込石懸橋相分不申候

一、常願寺川上湯川ト落合ノ上ニテ山抜イタシ眞川打泊リ候様、風評御座候テ川筋村々ノ者共深ク心配イタシ居候へ共、左様ノ儀無御座候、成程所々山崩レ出川止リ居候由ニ候へ共、夫レノ川道相付キ只今ノトコロ川ニ異變無御座候

一、御田地損所見分方左ノ通ニ御座候
一、千十石ノ内六百石高程
一、二百八十石ノ内百三十石高程

向新庄村
一本木村

一、二百七十石ノ内百三十石
手 屋 村

右村々如斯御座候、右ノ外人損シモ御座候へ共、巨細ニ相知レ申サス候、但滑川御藏所、並給人藏及波除川除御普請所等、余程相損シ申候、此段御達申上候(午三月五日)

口上書●申上候、新川郡常願寺川上前月二十六日大震ニテ崩レ、湯川ノ上ニ水溜リ居候處、昨二十六日申ノ上刻頃、泥水、砂岩石木呂等打交リ、大場前荒川口へ押上ケ候處、町新庄領ニテ東西二口ニ別レ流レ來リ、村々御田地大損ノ所、同役へ見分方ノ儀申談、大体ノ儀申上ケ御座候へ共、入川通行未タ相叶ヒ申サス、減水次第同役、相同路見分ノ上、委曲御達申上候へ共、大變故豫メ左ニ申上候

一、荒川町新庄村領内ニテ、西へ切込、上富居村領へ押上、上赤江村、下赤江村、粟島村、粟田村、中島村、右六ヶ村御田地殘ラス入川、尤人家泥水等ニテ多分埋メ居候、豊田村、城川原村、上野新村、下富居村、右四ヶ村ハ御田地岸崩レ、外ニ泥地ニ相成、中島村領ヨリ神通川へ落合ヒ候、東へ入川へ罷出テ申ス儀、相叶申サスニ付減水ノ上委曲御達申上候

一、新庄町、人家百二十軒流失、人モ數多相損シ候様申聞候へ共、右ノ外人々助ケ合ヒ無難ノ體ニ相聞へ、尤二ヶ所人家流失仕候

一、常願寺川兩縁御田地、並人家大變ノ儀ニ風聞仕申候

一、富山様御領少々泥込ニ相成候由風聞仕候、依テ御達申上候、以上(午四月二十七日)
口上書ヲ以申上候、新川郡常願寺川上、當二月二十六日曉八ツ時頃、大震ニテ山崩レイタシ、湯川並たね川等川上ニテ溜居申様ニテ、三月十日出水、又候先月二十六日晝八ツ頃出水、御達申上置候所ニ付見分仰

渡サル趣、即罷越シ見分仕候所左ノ通りニ御座候

一、上瀧村ヨリ大場村道程二里計リノ處、兩縁皆流レ申候様子、川縁村々残ラス上下ニ相成申候、人損

シ等ノ儀ハ何程御座候哉相分リ申サス候へ共、大体聞合申候處、死人ハ七八百人ノ様子ニ御座候、尤千人計リ行衛相知レ申サヌ者モ有之様子ニ御座候、尤都合千七八百計行衛相知レ申サス候、且其内ニハ欠落仕候者モ御座候様ノ風聞モ御座候

一、二十八ヶ村太田組 但家數七百軒、流レ申様子ニ御座候

一、四十一ヶ村島組 但家數七百軒右同斷

一、十八ヶ村高野組 但家數百六十二軒右同斷

一、四千四百九軒

一、二十一ヶ村廣田組 但家數四十七軒右同斷外ニ死人十二人

一、御田地相損申儀ハ、何程ト申ス儀ハ相分リ申サス候尤御郡役所ニテモ相分申サス様子ニ御座候、何レ常願寺川ニテ用水カラ水當リ、草高六萬石余ノ所、當時ハ四萬石計家泥下ニ相成候

一、作用水無御座候ニ付、御田地ハ有難候哉ト奉存候、未々迄、御田地ニ相成申サスヶ所モ御座候様見分仕候儀ニ御座候、右見分ノ通御達申上候、以上(午五月四日)

口上書ヲ以テ申上候、新川郡常願寺川筋、前月二十六日、大出水損所御達申上候へ共、只今大体ノ所又候御達申上候

一、上瀧村ヨリ西縁里數五里計リ、西水橋マテ川除、御普請所流失仕リ村々泥下石岩置相成申候

一、岩峠寺宮崎村ヨリ、東縁東水橋迄同斷

一、草高一萬六千四百七十石、太田組内一萬四千三十石計リ、泥下村々

一、二十八ヶ村人家泥込ニ相成申候

一、二萬三千三十四石八斗、島組内一萬三千三百二十石、泥下ニ相成候

一、一萬七千五百九十九石一斗、高野組内五千五百二十石、泥下村々

一、十八ヶ村人家泥込ニ相成申候

一、一萬四千六十四石、上條組内二千五百石計リ泥下村々

一、十三ヶ村人家泥込ニ相成申候

先達テ、礪波郡、同役共同道ニテ聞合セ御達申上候通りニ御座候、依テ御達申上候、以上(午六月十一日)

大地震立山變事録

安政五年午年三月巳ノ刻ヨリ立山之内常願寺川入谷ニ當リ、山間鳴動シテ午ノ刻ニ至リ、常願寺川筋一面ニ黒烟立上リ、其中ヨリ大巖大木森羅萬象一時ニ押流、水ハ一滴モ相見エ不申、堅キ粥之如ク成泥砂押出シ其内ヨリ大岩小岩打交リ、黒烟立上リ芦峠村、本宮村邊ニテ二三十間計リノ大岩流レ出テ、夫ヨリ二里計下横江村邊ニテハ七八間計大岩流出ル事ハ、芦峠村邊ヨリ三里計リ、馬瀬口村大森邊ニハ、長十二三間計ヨリ五六間計リ、廻リ一二丈計之大木小木麻ノ如シ、夫ヨリ五六里計ノ間水橋迄ハ、長三四間計リ廻リ四五尺計ニ打碎ケ、大木小木ノ根、朽木等流レ出事譬ニ物ナシ、其内ニ四五間計廻リ之桎ノ木ニ、猿二匹乘

止リ、尤其木根ナカラ立流レ、半屋村境ニ流レ今日迄、其木其儘有之、其外見聞筆頭ニ不及

一、芦峠村馬瀬口村ニ至レハ、山間餘程離レ候故、常願寺ニ□凡十七八町モ有之、廣川原ト相成候故、泥砂大岩大木等一面ニ發亂シ、窪ミノ所ヘハ一丈モ溜リイツレ高低ナシ、一面平等ト相ナル

一、此山嶺突浪一刻二刻ト流レ出候ハ、常願寺緣四五里ノ間ハ泥世界ト相成、數萬之人命ニ拘リ可申唯一浪ニテ止リ候故、先格別ニ死人無之、是全ク神佛之加護ナランカ

一、芦峠村ヨリ一里下山間之村ニテ、家數凡七八十軒計有之、常ハ川ヨリ二丈計モ高ミニ候處、今度流レ出タル岩ニテ石村泥砂押込、流失家五軒、損シ家三十軒計リト申ス事ニ候

一、岩峠村坊二十八坊有之内、川縁ニ低ミノ坊八坊計泥押入ル由

一、右突浪之瀬先キ、馬瀬口村ヨリ十餘町計隔テ東之方泊リ村之際、眞川ト相成夫ヨリ下モ直北ヨリ□惣川水勢三塚村之村下ニ附、東大森、西大森、半屋村、日置村、利田村之上ニテ二瀬ト相ナリ、一瀬ハ元川江出二三歩計ナラテ流レ不申、眞川ハ利田村之内粟原村之村中ヘ打込入、家少々四軒計リ押流レ、同村六郎左衛門之家腰ヨリ西芦原村一村皆流、又此村ニテ二瀬ト相成、一瀬ハ田添村、入江村、二杉村ニテ元村ヘ出ル也、今一瀬ハ西芦原村ニテ曾我村、上鉾ノ木村、淺生村、稻荷村、塚越村、竹内村、無量寺ノ垣根ヨリ新堀村以上ニテ、白岩川迄落當時之眞川ト相成、舟渡シ竹田村ニ有之、此入川ハ七十ヶ年前寛政元年之洪水入川跡也、右村々之内流失之家ハ二十竈計リ泥入ニテ埋ミ、又ハ流水懸リ損シ家等ハ大凡二百餘ニモ相成候ヤ、未タ泥砂之内之通行難計取調兼候

一、白岩川一集ニ落合下モ水橋港迄ハ、凡二里許、縁村々ノ田畑之内ヘ押入相損スル、其變地地高數未

タ取調兼候ヘ共、數萬石之様ニ被存候

一、水橋之湊、暫時流水ニテ止リ、泥砂流水ノ下ヲ潜リ、海ニ出川瀬之内渦マキ是マテ、見受ケサル珍事ニ有之候事

一、此後之變有無之説信用スヘキニ非ス、併シ追々奥山崩レ口之様子被見届、新堀善三郎、天正寺十兵衛等ヨリ數十人被指置候ヘ共、山々谷々未タ數十丈ノ深雪、其上山間ニ鳴動不止故、今度之山變動之邊ハ近寄り見届候儀相成兼候故、登山ノ者山中之推察等追々可申届事

三月十四日

新堀村 朽木 双水

朽木義通氏手記（十村役手代、兵三郎手記トモ傳フルモ原文ノ儘トス）

安政五年午二月二十五日曉子刻大地震

三月十日午刻山突破

四月二十六日午刻泥洪水

朽木 義通

安政五年戊午二月二十五日子刻大地震ノ大略

一、立山湯川谷奥、大鷲山小鷲山峰ヨリ裂ケ湯川ニ突キ込ミ、東方ハ松尾水谷割レ崩レ、熊倒シ小池谷モ崩レ落チテ湯川ヲ突キ留メ、立山温泉ハ數百丈ノ底トナリ谷一体平トナレリ

一、右立山温泉ニ小屋修繕材木伐リ出シノ爲メ出張セシ杣三十三人、狩人三人計三十六人温泉小屋ニテ

止宿シナカラ即死セリ

一、和田川奥へ中地山村ノ狩人十一人熊捕ト出テタルカ是亦山崩レノ爲メ即死セリ

一、常願寺川眞川筋山々谷々ノ崩壊數知レス、中ニモ鬼ヶ城等七ヶ所別シテ大崩レシ常願寺川ヲ突キ留メ、暫時ニ岩石ヲ流シ、川底ヲ高クシ、下ハ横江村ノ村上ミ迄岩土ヲ流シ出シ、千垣芦崎寺村ハ常ヨリ二三丈高クナリ此後ハ少々ノ雪解ニモ水難心元ナキニ付村内ノ人々山中ニ立退キ住居シツ、アルコト三月三日見届ケタリ

一、右湯川谷ヲ始メ眞川筋ノ山崩レヲ二月二十八日原村宗七ト申袖頭下袖十人計ヲ召連レ、鍛崎山ノ頂ニ攀チ登リ遠見セシモ雪アリ且ツ地震山崩レノ跡トテ近邊ニ近寄ルコト能ハサレ共晝夜山鳴リ響キ候事慥ニ聞届候而テ常願寺川ノ水色當時壁色ヲナシ水半分泥半分ノ流レナリ

一、富山ニテハ常願寺川決潰セハ大湖水トナルヘシトテ上下大ニ騒キ前田長門守様ハ俄ニ安養坊山ノ西大竹村ノ寺院ニ御立退アリ諸家中市民、家財ヲ捨テ老幼ヲ携ヒ安養坊山ニ走リシハ二月二十七八日ヨリ三月二三日マテノ事ナリ

里中ノ大地震大略

一、大地震ハ西ハ富山御城邊ヨリ北ハ大島邊迄幅一里ノ間ヨリ出テ東北ヘサスコト四五里ノ間ナリ、南ハ田中箕浦村、新庄村、向新庄村、常願寺村、竹内村、清水堂村ヨリ少シ北ヘ下砂子坂、石佛村、高柳村、滑川、高月、狐塚、肘崎村迄ニテ右大地震ノ村數ハ凡ソ百ヶ村、全潰家屋百四五十軒、半潰家屋三四百軒、内寺庵ハ針原中村ノ光仰寺半潰、新庄ニテニヶ寺、向新庄ノ寺ハ三四分ノ損、二

杉村小路ノ寺ハ五六分ノ損、肘崎ノ寺ハ全潰、池田町村、小出村、柳寺村ノ寺ハ四六分、下砂子坂、上砂子坂ノ寺ハ三四分、石割ノ寺ハ四五分ノ損ナリキ、石割村杉木彌五郎ノ家ハ全潰ニテ新堀村兵三郎ノ家ハ六七分、番頭名の場村常願寺村等ノ大家三四分ノ損タリ、右村々ノ中ニテ死人四五十人ニ及ヒタリ

一、安政五年午三月十日暖氣大ニ加ハリ殆ト四五月ノ如ク、此日巳ノ刻頃ヨリ常願寺川ノ上流各山々鳴動シテ午ノ刻ニ至リ、川筋一面ノ黒烟立上リ、其内ヨリ大小岩大樹森羅萬象、押出サレ、右押出セル内ニハ水トテハ一滴モナク皆堅キ粥ノ如キ泥砂ニテ其内大小岩相交リ、又此ノ岩ト岩ト衝突シテ碎ケ時々黒烟立上ルノテ、芦崎寺マテハ二三十間計ノ大岩ヲ押出シ、二三里下ノ横江村ノ邊テハ七八間ノ石ヲ押出シ、夫ヨリ二三里下ナル利田朝日村邊テハ七八尺一丈迄ノ岩ヲ押出シテ岩石山ヲナシ、又大木小木麻ヲ亂シタカ如ク長十二三間ヨリ五六間、廻リ一二丈ノモノ芦崎寺村ヨリ河口水橋迄押出シ、其ノ内ニ木根榎木生木朽木アリ、就中廻リ六七尺ノ樫ノ木ニ猿二匹攀チナカラ芦崎邊ヨリ半屋村邊マテ四里餘リ流レ來リ其木其儘今モ河中ニ立テリ、實ニ前代未曾有ノ變事ナリ

一、芦崎寺ヨリ馬瀬口邊マテ川底一二丈高クナリ、川底平地一面トナレリ、此山突出シ二三回ニシテ夜ナランカ被害十里四方ニ涉リ人命數十萬ヲ損スルニ押出シ一回ニ止リ而モ晝ナリシカハ死人モナカリキ、是レ神冥ノ御加護ニヨレリ

一、千垣村ハ川ヨリ二三丈高キ所ナルモ泥砂ノ爲メ川高クナリ流家六軒、損家三十三軒アリキ、岩崎寺村二十四坊ノ内下ノ段ニ住居スル坊九軒泥ニテ押潰サレタリ

一、右突出波ノ瀬先キ馬瀬口ニ當リシカ此ノ普請丈夫ナリシ爲メ慥ニ防キ堤前高サ二三間長サ十二三丁ノ泥山ヲ築キタリ、若シ此堤弱カラシニハ富山城下ハ泥ニ埋マルモノヲ藩主ノ御普請ナリシ爲メ此厄難ハ免カレタリ、泥瀬ハ泊村ヨリ眞北ヲ指シ、惣川ハ三塚村、東大森、西大森、半屋村ノ三村ヲ經テ利田村ノ上ニテ二瀬トナリ本川ハ三分ノ流ニテ入川ハ粟原村ノ中ニ入り人家五軒ヲ流シ損家七八軒ニテ同村六右衛門ノ家腰ヨリ眞北ヲ指シ、西芦原村一村ヲ皆流シ、此レニテ二川トナリ、一ハ田添村一村ヲ押シ流シ、常願寺村、入江村、二杉村ニテ元川へ出テ、今一川ハ西芦原村、曾我村、上銚木村、塚越村、稻荷村、國重村、竹内村、新堀村ニテ白岩川へ落達ミタリ、サテ以上ノ川ハ眞川ナリ湯川ハ泥砂ニテ上流塞カレ一滴モ今流レヌアリ、常願寺川ノ定渡場ハ竹内村ニ相立ツ、アリ一、右ノ水ニテ流失セシ家三四十軒泥ニ埋マリ或ハ損セシ家百軒アレ共、一体カ粥ヲ流セシ如ク深サ數尺アレハ歩行叶ヒ難ク何方へモ通行出來ス

一、上芦崎寺ヨリ下西水橋港迄田畑ノ損害大凡ソ四五千石ニ及フ

一、水橋ノ湊ハ流木堆積シテ山ヲナシ泥水其下ヲ流レ潛テ海へ出テ川瀬舞ヒ込ミ是カ爲メ海嘯波來ルヘシトテ老若男女四方へ駆走タリ

一、十一日ニナリ又々山崩レ溜水一時ニ抜ケ出ツヘク其ノ時ハ富山御城ヲ始メ市中殘ラス川底トナルヘシトノ沙汰アルニヨリ富山一統ノ大騒トナリタリ

一、長門守様始メ御廣式迄俄ニ再ヒ安養坊山ノ西大竹村ノ寺ニ御立退ニナリ、家中城下ノ人々老幼ヲ携ヘ家財ヲ捨テ安養坊山ニ駆登リ、本藩ニテハ上ハ岩崎寺ヨリ下ハ水橋迄、東西ニ叫ヒ南北ニ走リ

(唯飯米ヲ負フ) 中ニハ一村必死ト決シ一所ニ集リテ念佛三昧ノ様ナルアリ、五百石ハ地高ク水難ナシトテ人數一千餘豫メ來リテ止宿シ佐々木兵三郎ノ出張所ナル其家ニハ利田村六郎右衛門家内十人止宿セリ

一、今度流出セル泥砂ハ大鷲山小鷲山ノ裂崩レシ土ニテ、元來此ノ兩山ハ硫黃山ニシテ小鷲山ヨリ所々熱泉ヲ涌出シ、晝ハ一面煙立上リ夜ハ火氣立揚リ此ノ硫黃ノ勢、裂キタル岩故此ノ泥砂ヲ火中ニ入ルレハ焚ケルナリ

右三月十四日ノ見聞ナリ

右ノ次第故新堀村兵三郎ハ芦崎寺村、千垣村へ到リ杣頭ヲ撰出シ、奥山ノ様子ヲ見届ケサセントテ横江村マテ至リタルニ泥砂二三丈押上ケ歩行難ク、兵三郎ハ松本開役人酒屋小兵衛、江上屋五郎右衛門外、人足三人、山越サセ、十三日ニ千垣ニ至リ芦崎寺村ヨリ四人、千垣村ヨリ四人ノ杣頭ト下杣召連レ十四日朝登山ニ取極メタル旨、兵三郎ニ届出タリ、説而山々數十尺ノ深雪アリ、其上山谷鳴響未タ止ス、奥山ニ登ルヲ請合者一人モナシ、小兵衛、五郎右衛門ハ兵三郎ノ指圖ニテ幾千人ノ命ヲ救フヘキ大切ノ勤ナレハ賃錢ハ望ノ通り、又萬一異變アラハ妻養育スル約束ニテ漸ク登ラセタリ

新川郡奉行へ達セシ文書

乍恐書面ヲ以テ申上候昨十日晝時少々前常願寺川ノ川上鳴動シ先頃地震ニテ山拔致候個所ノ淀水一時ニ溢シ來リ候ニ付所方ノ者大ニ周章逃仕度致候處八ツ頃水橋川水ヨリ二尺増シ半時計ニテ引水トナリ申候跡ニ

テ承リ候ニ常願寺川ハ利田前ヨリ御普請所切込ミ白岩川へ落込ミ同川ヨリ小出川ニ落合ヒ夫ヨリ水橋川ニ出テ候テ半時ニテ引水ト相成候其後七ツ時ヨリ俄ニ出水シ水橋定渡場邊ニテ常水ヨリ五尺計増シ前後共深キ泥水ニテ剩ヘ材木夥敷流レ來リ此材木ハ川尻ニ山ヲナシテ候右川尻平常ニ尋ノ處此日ノ渦卷ニテ深サ幾程トモ難計暮方ヨリ引水ト相成流木ハ渦卷ノ中及附近ニ有之候然ルニ昨夜夜半頃ヨリ大南風吹キ出シ渦卷流木悉ク海中へ突出シ川尻ハ常ノ如ク相成候併定渡場ハ泥深サ四五尺アリテ船モ立ス候ニ付其旨昨夕東岩瀬及富山馬間屋へ案内ニ及置候尤モ明日ニテモ泥固リ候へハ渡船仕ヘク至急ノ御用ニ對シテハ暫クノ處川下ニテ越渡可申哉此儀ハ明日詮議ヲ遂ケ御達可申上候

午三月十一日

西水橋 肝煎

郡奉行殿

乍恐重テ申上候此夕川尻渦卷ノコト粗承リ何レぬシノ様ナル者顔ヲ差シ出シ候西水橋役人ニ相尋候處長サ四五間モアル鯨ノ如キモノ流レ來リ水橋川定渡場ヨリ百間計川下へ流レ行キ逆々卷ク川ヲ搔キ立テ川上へ一丁餘モ廻リ候勢中々以テ凄ク候故人々恐テ見物致居候川上ヨリ材木夥敷流レ來ルニ弱リ候哉川下へ行キ夫レヨリ形相見エス成候定シ渦卷ノ中へ入込ミシモノト奉存其後モ度々顔ヲ出タル者有之見物致シタル体ニ御座候、就中最モ不審ナルハ右鯨ノ如キ物渦卷ノ中ニアリテ五夕蠟燭ヲ一挺合セタル程ノ青キ火焰ヲ兩三度立上セ見物身ノ毛堅ツ計リニ恐候由ニテ又泥水ノ中故貌モ爾リ見定メ難ク角ハ如何ニモ見當不申候此日ノ出水ハ海汐ト突合川尻ニテ揉ミ合候故津浪モ可有之シト思ヒ婦人老幼夫々逃支度致居候

午三月十一日

東水橋町 肝煎

新川郡御奉行殿

常願寺川奥へ淀水ノ様子見届トシテ人足指登リ候様仰渡サレ候ニ付千垣村五助、宗五郎、宮路村與次右衛門、利田村吉六、忠三郎ノ五人差遣ハシ候處今朝罷リ歸リ聞取ノ趣左ニ申上候

一、五月二十一日朝千垣村ヨリ登山シ稱名川へ相向ヒ候處出水ノ爲渡越相成ヌうれイト申處ニ二泊仕二
十三日減水ニ付右川ヲ渡リ細谷へ登リ稗平ノ中程ニ出テ桑谷ニ荷物ヲ置キ彌陀原野追分ヨリ水谷ニ
下リ松尾ノ二階ニテ淀水ノ個所見受候先頃拔出候大水溜リノ上ニテ口ぐし谷邊ト熊倒欠口ニ二ツノ
水溜有之者當時見當不申齋ヶ峰へカ、リ水溜三ツ見内二ツハ大水溜へ流レ出テ當時小溜居不申候松
尾山ノ下ニ有之小サキ泥水溜二ツモ當時小溜居不申候湯川ノ方へ細キ青水ノ流レ付キ候前段大水溜
長サ三百間幅二百五十間ノ者見届候湯川ノ幅ハ十間計ニ相見エ候水勢早ク無滞相流候以上七ツ水溜
ノ内六ツハ水無御座口付居ト申聞候
一、右大池ノ西南齋ヶ峰ノ欠口ニ七八百歩ノ小池一ツ出居候得共水淺ク一時ニ山拔致候様ノ事一向無御
座候旨申聞候

一、狩込池ハ異變無之右ノ上ニテ黒烟上リ鳴渡申候
一、眞川ノ儀ハ先日山廻見分ノ通りニテ別ニ替リ無之候
一、右千垣村五助等此夜歸リ今朝罷出申聞ノ趣聞取仕繪圖相添御達申上候

午五月二十五日

新堀村 兵三郎 印

新川御郡所

今度地震ニ付當三月十日常願寺川泥水拔出候後又々出水ノ沙汰風聞候ニ付芦峯寺柚仁左衛門等八人奥山ノ様子見届サセ當十四日登山致サセ十七日未明罷歸申聞候趣左ニ申上候

一六

一、芦峯寺高山續キ登山仕稱名瀧ノ上越尻ヨリ彌陀原野ヲ通り松尾ノ頂ヨリ見渡スニ湯川筋ノ南縁ハ小池山、熊倒レノ下ヨリ崩落チ大鷲山頂ハ二三歩通り崩レ落チ小鷲山モ過半崩レ温泉場押潰レ狩込池ノ下モ崩レ北縁ハ古狩込池ノ邊ヨリ松尾水谷ノ坂下モ多ク崩レ彼此落石ニテ川淺クナリ水ハ石下ヲ潜リテ流レ候温泉場ノ湯小屋ト覺敷所ニ百間四方ノ水溜有之候得共水ノ入口モナク又押出ス憂モ無御座湯小屋ト小鷲山ノ間ハ平地ト相成候

一、眞川筋ハ奥妙神、中妙神ノ頂ヨリ見下シ候處大橋ノ下手ヨリ半道ハ兩縁山崩レ鬼ケ城等五六ヶ所大崩レノ個所有之水少シ宛溜居候眞川ノ水源見届ケ難ク候得共奥谷ニテ水溜ノ個所無之兩泥拔ノ義ハ無御座ト奉存候

一、稱名川ノ義ハ所々崩レ落チ瀧壺へ餘程石込ミ立山道材木坂邊ヨリ熊野權現鬼ケ淵マテ大山拔ニテ道形モナク、千手原小見村宗三郎ノ塚場ノ杉モ押埋リ藤橋ヨリ上手百間計泥乗上ケ候得共十日ニ流レ出シ此末ハ泥拔ノ心配無御座ト存候

右仁左衛門等下山仕申聞ノ趣御達申上候 以上

午三月十七日

新川御郡所

新堀村

兵三郎

常願寺山入眞川水溜ノ様子見分ケ方トシテ山廻リ足輕等登山唯今町新庄村マテ罷歸候ニ付様子承リ候處右

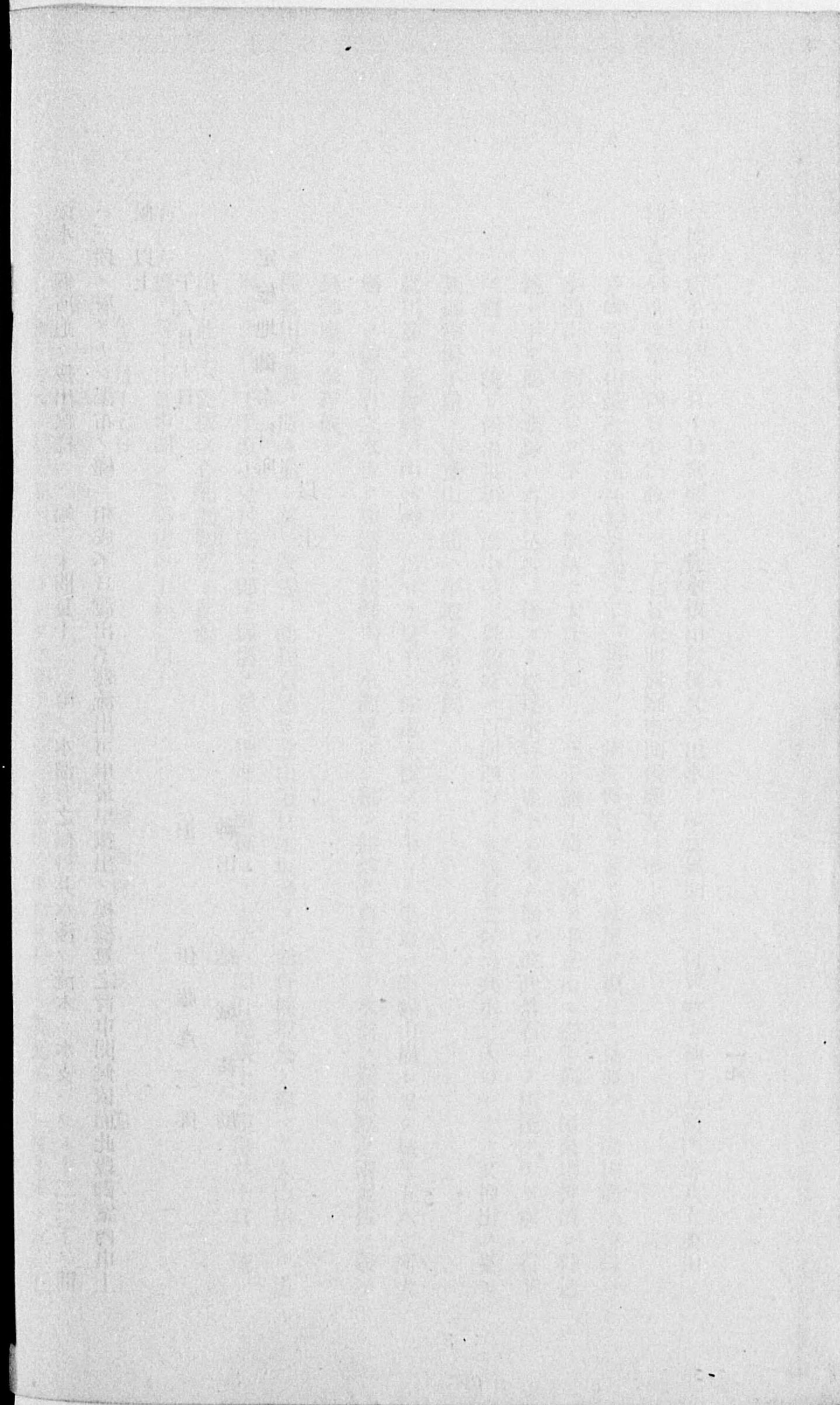
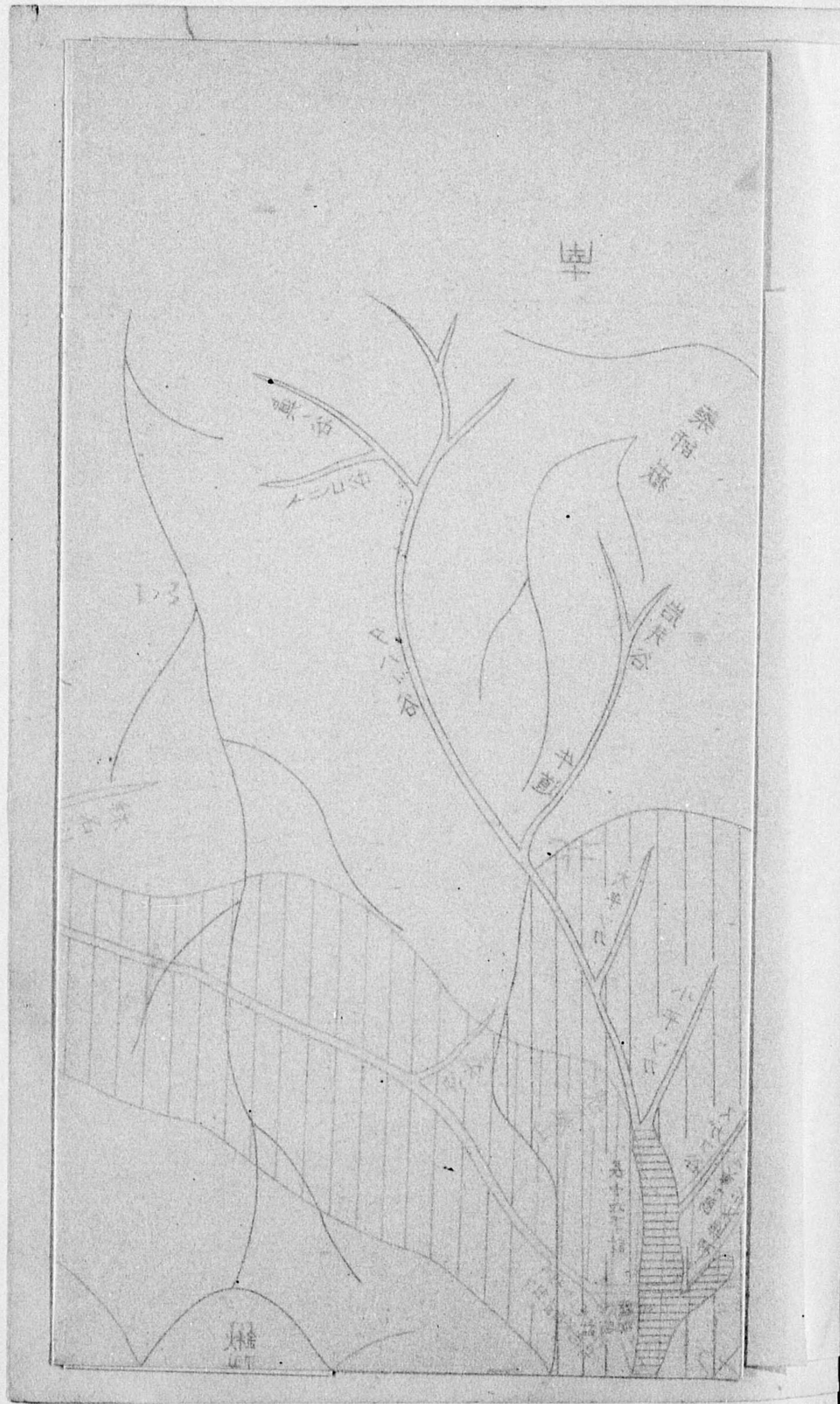
淀水ノ個所追々拔出候様ニテ幅三十間長十二三町ノ水溜有之候得共水淺ク流木ニ水支ヘラレ十二三丁ノ間ハ三段ノ層ヲナシ瀑布ノ様ニ相成不日淀出不殘流出可申最早拔出ノ模様無之旨申聞候依而此段御案内申上候 以上

午六月十日

泊 伊藤彦三郎
神田 結城甚助

定檢地御奉行所

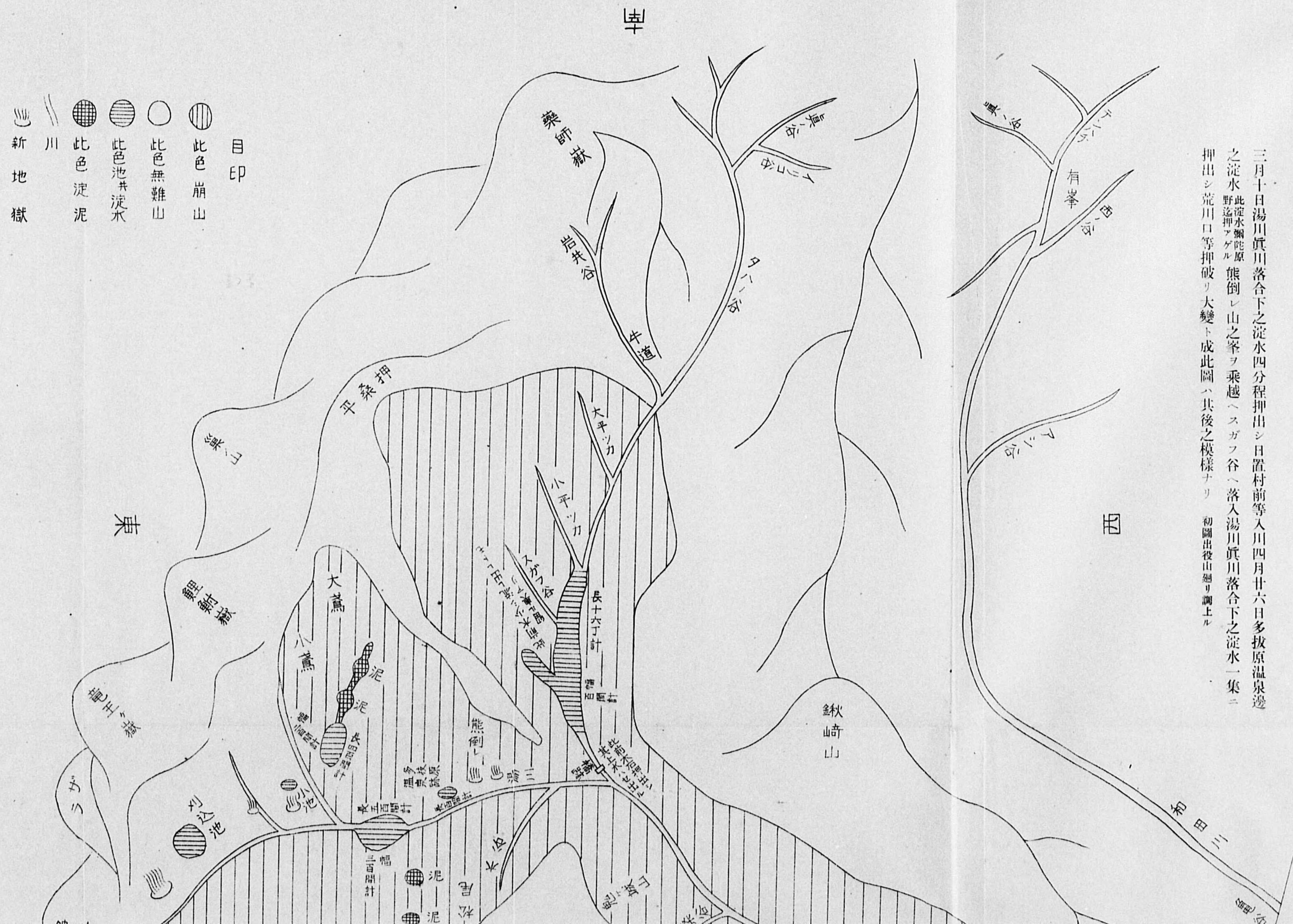
以上



5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

安政五年二月廿五日夜大地震新川郡常願寺川水源山々動崩其淀水同年
 三月十日四月廿六日兩度ニ押出シ御領國之内百四十八ヶ村外富山御領
 泥
 置等變損其後役人登山見取繪圖

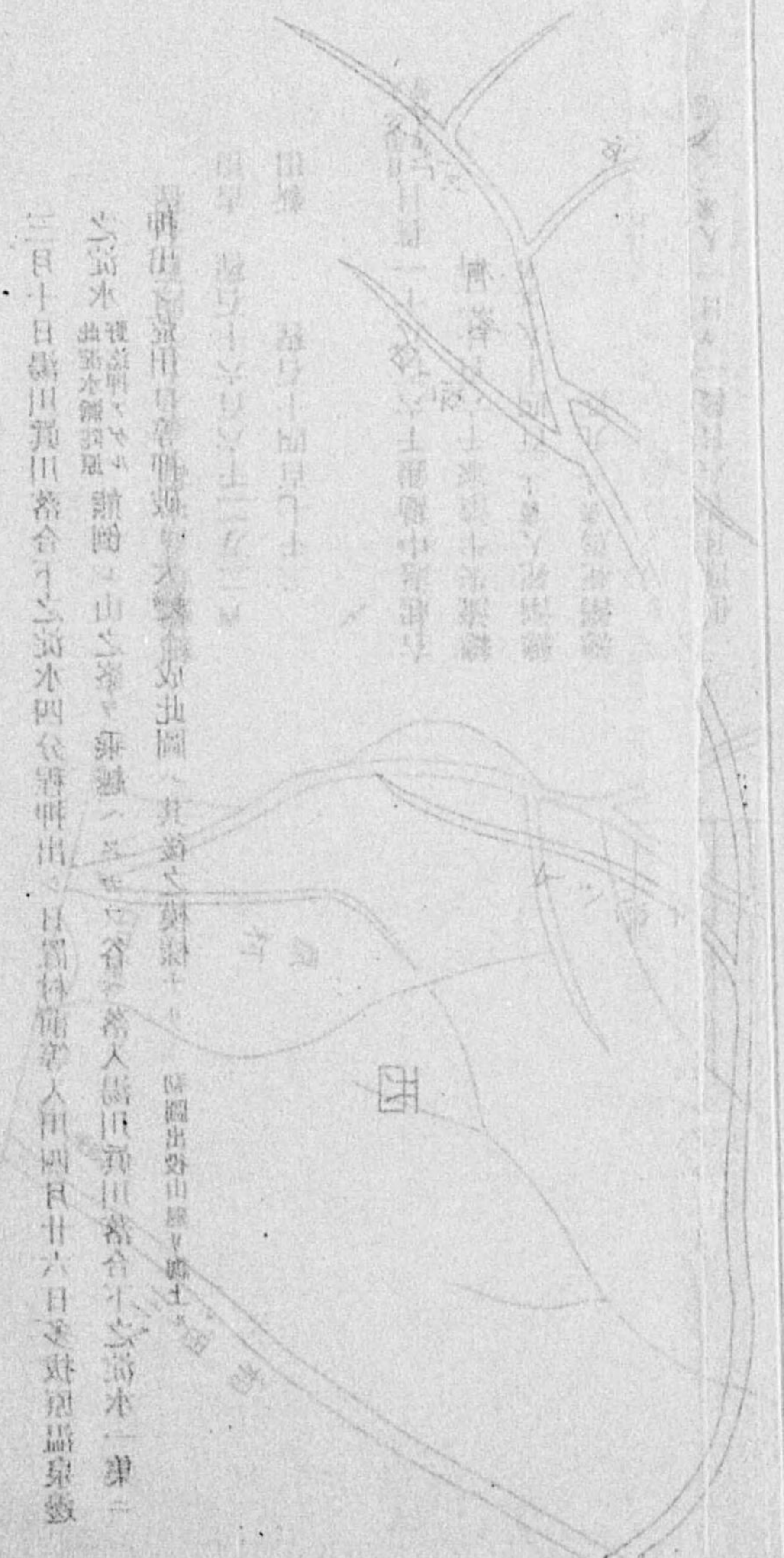
三月十日湯川眞川落合下之淀水四分程押出シ日置村前等入川四月廿六日多拔原温泉邊
 之淀水 此從水彌陀原 熊倒レ山之峯ヲ乘越ヘスガフ谷ヘ落入湯川眞川落合下之淀水一集ニ
 押出シ荒川口等押破リ大變ト成此圖ハ其後之模様ナリ 初圖出役山廻リ調上ル



- 目印
- 此色崩山
 - 此色無難山
 - 此色池井淀水
 - 此色淀泥
 - 川
 - 新地獄



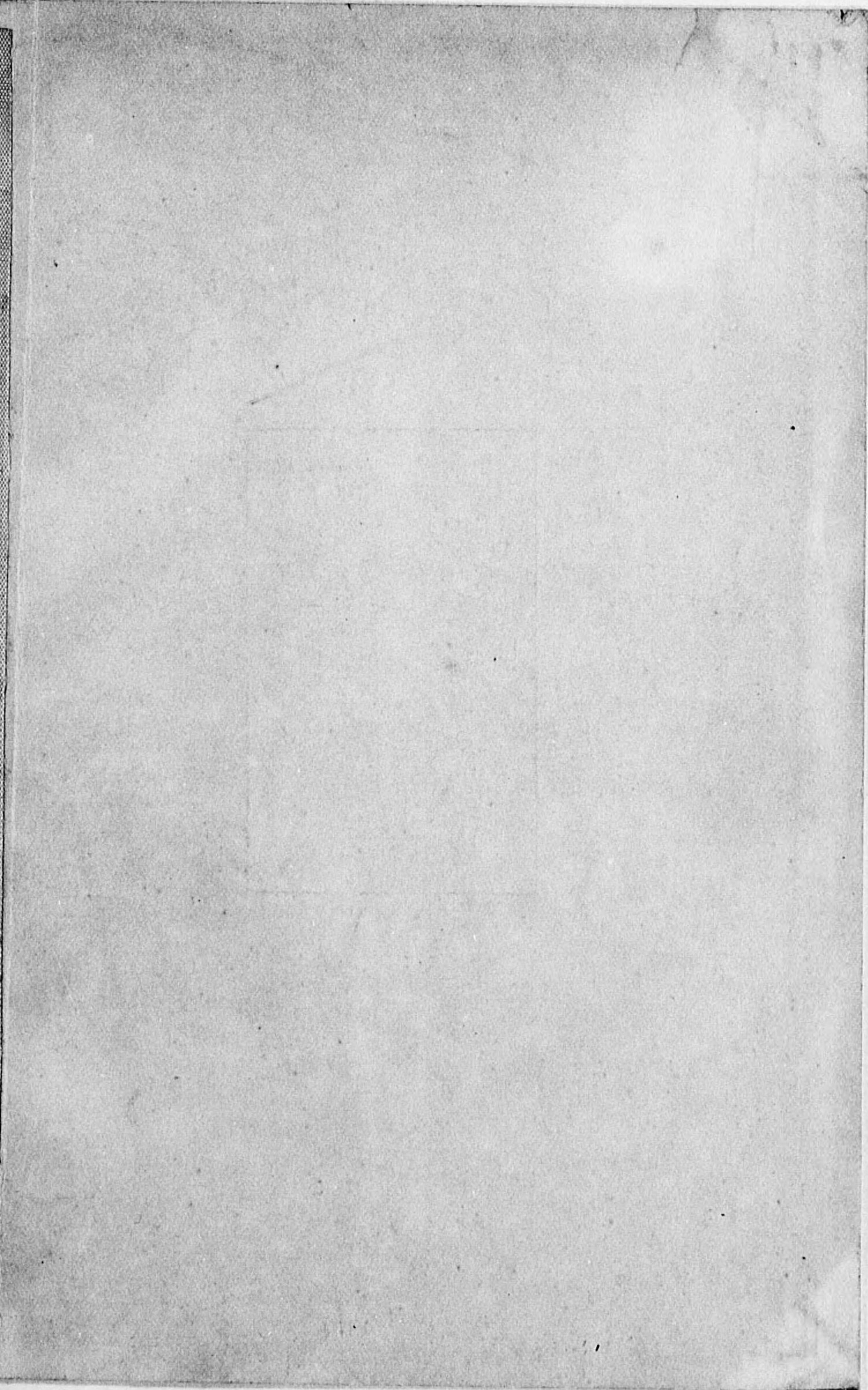
置業變附其發券人登山見泉餘圖
 三月十日四月廿六日兩週二時出、噴前圖之内百四十八、山林、長富山、西前
 安如正辛二月廿五日發大壯靈祿川、常願寺川、水、新山、、應備其、資水、圖



昭和十二年六月二十五日印刷
 昭和十二年七月一日發行
 昭和十六年二月二十日修正
 常願寺川治水期成同盟會

印刷人 富山市袋町九 高見清平
 印刷所 富山市袋町九 高見印刷所

912
122



終

